

# 肥後における装飾古墳の展開

Origins and Development of Decorated Tombs in Higo  
(Kumamoto Prefecture), Kyushu

高木正文

はじめに

- ①加飾された石棺について
- ②八代・天草の装飾古墳
- ③肥後中・南部丘陵の装飾石棺
- ④宇土半島の装飾古墳
- ⑤肥後中部の直弧文を施す装飾古墳
- ⑥熊本平野南部の装飾古墳
- ⑦熊本平野北部の装飾古墳
- ⑧菊池川下流域の装飾古墳

⑨菊池川中流域の装飾古墳

- ⑩菊池川上流域と阿蘇谷の装飾古墳
  - ⑪諏訪川下流域の装飾古墳
  - ⑫菊池川下流域の装飾横穴墓
  - ⑬菊池川中流域の装飾横穴墓
  - ⑭球磨川中流域の装飾横穴墓
  - ⑮まとめ
- おわりに

## 【論文要旨】

装飾古墳の研究は、多くの人が手がけ、多くの論考が発表されているが、年代観が研究者により大きく異なり、あまり進展がみられない。それは編年的研究の遅滞に起因しているとみられる。

肥後（熊本県）では、全国で最多の190基程の装飾古墳が確認されており、装飾古墳研究上重要な所である。本稿では肥後の装飾古墳について、石室構造と装飾文様の両面から新旧関係を明らかにし、各地域ごとに編年を組み立て、それらの相互比較からその初源地とそこからの波及状況について提言する。

概要を述べると、初源地は肥後南部の八代市で、横穴式石室の石障や箱式石棺の内壁に鏡とみられる円文を彫刻したもので、円文以外に弓・韃・短甲・直刀などもあり、5世紀前半に位置づけられる。その後、装飾古墳は天草や宇土半島へと分布域を広げ、5世紀後半にはさらに北上して熊本市の北部まで広がりをみせる。それまで彫刻文に赤の彩色のみであったのが、この段階で青や黄の彩色も加わり華やかな装飾になる。6世紀に入ると、肥後北部の玉名市や山鹿市付近にも装飾古墳が出現する。横穴式石室の奥に設けられた石屋形を中心に装飾が施され、装飾も線刻文を彩色したものや彩色のみで描いたものへと変化する。この肥後で発展した装飾古墳は、肥後独特の石室構造と共に九州北部地域へと広まり、6世紀中頃には新たに大陸の思想の影響を受けた装飾文も付加されるようである。さらに九州の装飾古墳が日本列島各地の装飾古墳造営に影響を与えたものと考えられる。

## はじめに

肥後（熊本県）には、現在約190基の装飾古墳が確認されており、数の上では全国一を誇っている。その中には横穴式石室の他に箱式石棺、家形石棺、横穴墓に装飾文様が描かれたものも含まれており、極めて多彩である。

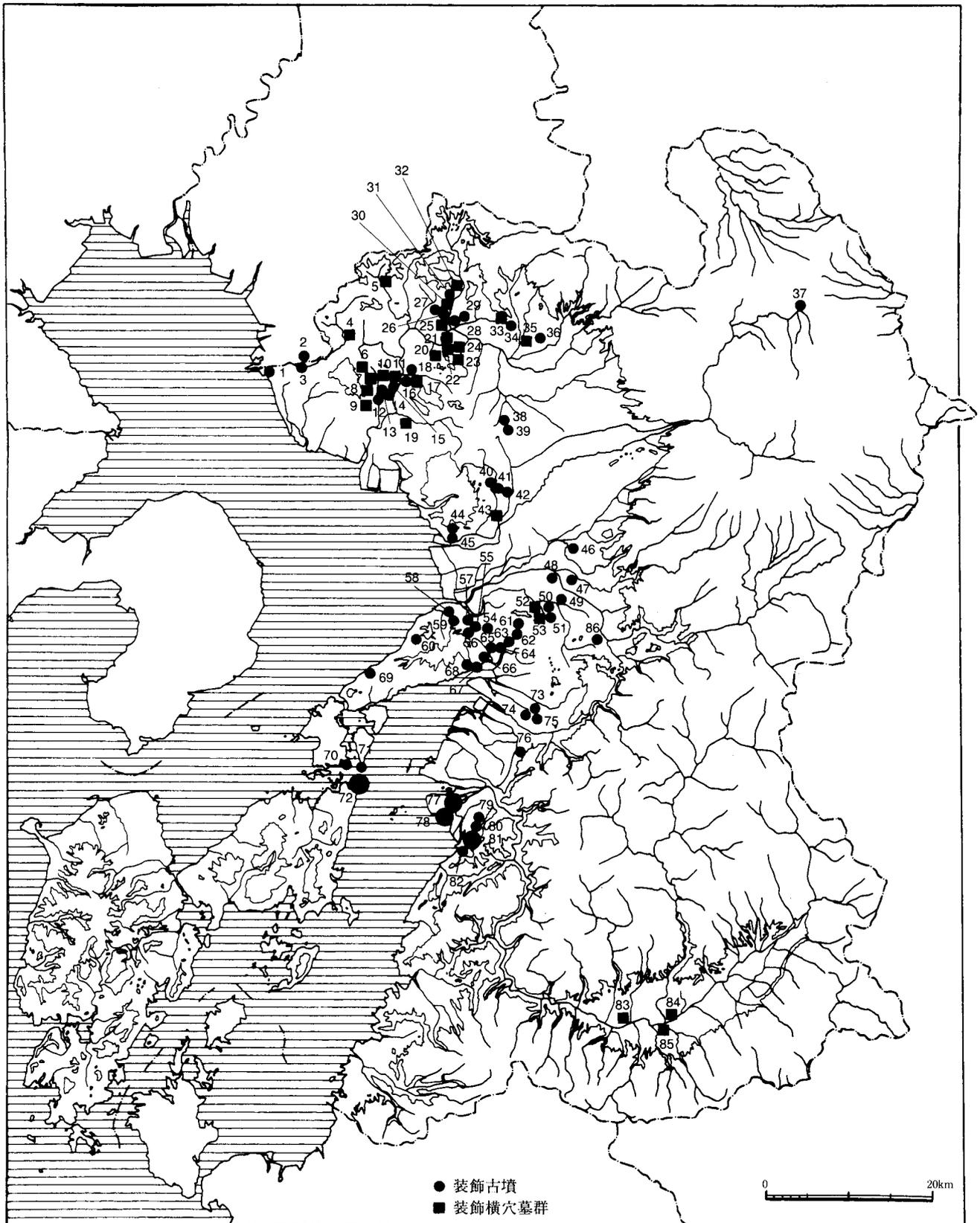
肥後の装飾古墳の発見と研究の歴史については、乙益重隆氏が詳しくまとめておられる〔乙益 1984 a〕。特に偉大な業績は大正年間の浜田耕作・梅原末治氏による肥後の装飾古墳の全面的な調査と報告書の刊行〔浜田ほか 1917 a・1919 a〕で、その後の装飾古墳研究の基本文献となった。その後、大著を含む多くの研究書が刊行されたが、最も魅力的で説得力のあるものは、装飾古墳の石室図と文様模式図を組み合わせた、小林行雄氏の「九州の装飾古墳変遷図」〔小林 1964〕である。また装飾古墳を墓室形態や図文の系譜別、さらに地域ごとに様式分類し編年した森貞次郎氏の研究〔森 1985〕も大変な労作である。

肥後の横穴式石室には、石障を立て巡らしたもの、石屋形を持つもの、複室構造のものなど独特なものがあり、いくつかこれらに関する論考も発表されている。横穴式石室の最近の研究の中では、石障系石室の羨門と玄室の高さの差やU字形の抉り込みの深さ等を数値で比較して変遷を論じた高木恭二氏の論考〔高木恭二 1994 a〕や、石屋形の形状を細分して変遷を論じた古城史雄氏の論考〔古城 1994〕等は最も秀れたものである。一方、装飾古墳に関する最近の論考では、肥後を南部の円文、中央部の直弧文、北部の三角文の文化圏に三分割し、その文様が各地域のシンボルであると考えた高木恭二氏の論考〔高木恭二 1994 b〕は興味深いものである。

本稿では、小林行雄氏に習って、肥後の各地の装飾古墳（図1）の変遷を石室（または石棺）図と装飾文様図を使って、系譜ごとに解明したいと思う。従って本稿の主役はこの変遷図である。

図1 肥後における装飾古墳の分布図▶

1 四ツ山古墳	23 岩原横穴墓群	45 千金甲3号墳	67 桂原2号墳
2 萩ノ尾古墳	24 桜ノ上横穴墓群	46 井寺古墳	68 桂原1号墳
3 三ノ宮古墳	25 鍋田横穴墓群	47 今城大塚古墳	69 小田良古墳
4 今村岩の下横穴墓群	26 チブサン古墳	48 坂本古墳	70 長砂連古墳
5 田中城下横穴墓群	27 オブサン古墳	49 甚九郎山古墳	71 広浦古墳
6 石貫穴観音横穴墓群	28 臼塚古墳	50 北原1号墳	72 大戸鼻古墳群
7 石貫ナギノ横穴墓群	29 弁慶ガ穴古墳	51 石ノ室古墳	73 竜北高塚古墳
8 石貫古城横穴墓群	30 付城横穴墓群	52 御領横穴墓群	74 大野石棺
9 原横穴墓群	31 馬塚古墳	53 牛頸横穴墓群	75 大野窟古墳
10 横島横穴墓群	32 城横穴墓群	54 宇土古城古墳	76 門前2号墳
11 城迫間横穴墓群	33 湯の口横穴墓群	55 東畑古墳	77 小鼠蔵古墳群
12 大坊古墳	34 御霊塚古墳	56 仮又古墳	78 大鼠蔵古墳群
13 永安寺西古墳	35 瀬戸口横穴墓群	57 椿原古墳	79 五反田古墳
14 永安寺東古墳	36 袈裟尾高塚古墳	58 梅崎古墳	80 長迫古墳
15 馬出古墳	37 上御倉古墳	59 城塚古墳	81 田川内古墳群
16 塚坊主古墳	38 石川山4号墳	60 ヤンボシ塚古墳	82 竹ノ内古墳
17 長力・北原横穴墓群	39 横山古墳	61 晩免古墳	83 大村横穴墓群
18 江田穴観音古墳	40 釜尾古墳	62 潤野古墳	84 小原横穴墓群
19 田崎横穴墓群	41 富ノ尾1号墳	63 宇賀岳古墳	85 京ガ峰横穴墓群
20 小原浦田横穴墓群	42 稲荷山古墳	64 不知火塚原1号墳	86 中郡古墳
21 小原大塚横穴墓群	43 古城横穴墓群	65 鴨籠古墳	
22 長岩横穴墓群	44 千金甲1号墳	66 国越古墳	



## ①……………加飾された石棺について

菊池川流域(図2)には、本格的な装飾古墳が出現する以前に、二種類の加飾された石棺が存在している。1つは箱式石棺の内壁に線刻文が施されたものであり、2つ目は舟形石棺や家形石棺の棺蓋に方形区画などを彫り窪めたものなどである。

箱式石棺に線刻文があるのは、玉名郡岱明町の大原石棺群[田添 1984 a]で、昭和42年から43年にかけて13基の石棺が調査され、そのうちの1基の9号石棺に線刻文があった(図3)。この石棺は、棺身を大小の安山岩の板状割石15個で長方形に組み、底に同じ石材22個を敷き、北壁に接して平石2枚を重ねて枕としていた。棺蓋も同じ石材4枚をつないでかぶせていた。石棺の形態からみて3~4世紀代に造られたと考えられる。線刻文は長側壁の中央石材にある。石材の中央上方に短直線3本を中点で交わらせた星状の図文、その下に小舟に乗り笠を被って棹さす人物のような図、右下に竪穴住居の屋根のような図などがみられる。この図は石棺床面下の埋没する所まで描かれており、組立前に描かれたことは明らかである。

なお近年この隣接地の開発で数基の箱式石棺が調査されたが、そのうちの2基にも星状の図文が線刻されていた。佐賀県においては、この星状の図文に類するものが、石蓋土壌の棺蓋に描かれているのが数例発見されており、それとの関連が考えられる。

この線刻文のある箱式石棺は、その後系譜が繋がらないことから、弥生時代の絵画の名残として捉えておきたい。

菊池川流域には、4~5世紀代にかけて、阿蘇凝灰岩で造られた舟形石棺、箱式石棺、家形石棺が多数分布し、秀れた石工集団がいたことが知られている。それらの石棺の一部には彼らの彫刻技術の高さを示すかのように棺蓋に方形区画を入れて彫刻したり、三角文の線刻を加えたりしたものもみられる。

玉名郡天水町の経塚古墳の舟形石棺[乙益 1984 b 図4-1]は、「全長2.74m、身蓋合わせると高さ1.33mを有し、身蓋共に前後に突端のふくらんだ縄掛突起を丸彫りにしている。棺蓋は棟が平らで幅16cmを有し、全体は切妻の家形に近い。棺蓋の両側面には上段に棟から続く幅約10cmの帯を彫出し、下段の舟べり(幅15cm)との間を2区にわたって梯形に彫りくぼめ、一種の装飾効果をあらわしている。(中略)棺身内部には造付けの石枕を彫出し熟年の男性人骨1体が安置されていた。」

鹿本郡鹿央町の持松塚原古墳の舟形石棺[隈 1984 a]は、一部を確認したまま埋めもどされているので全容は不明であるが、巨大な石棺で、身蓋とも短辺に2個ずつの縄掛突起がある。棺蓋は切妻の家形で、棟は平らで、両側面には長方形の陰刻が3列ずつ並んでいる(図4-2)。

持松塚原古墳と同じ台地上にある持松3号石棺[原口 1984 a]は、家形石棺で(図4-3)、「棺蓋の長さ250cm、幅94cm。棺蓋中央に長さ162cm、幅9cmの棟をとり、その両斜面中央部に32×10cmの長方形の長辺を棟と平行に2個ずつ陽刻し、その左右両端に刀尖状の陽刻をそえる。さらにその下方に長さ192cm、幅19cmの帯状の陽刻を棺身に平行に施す。陽刻の作り出しの厚みは約1cmである。これらの陽刻は棟を挟んで対称形をなし、均整がとれている。」



図2 菊池川流域の加飾のある石棺位置図

- 1 大原9号 2 経塚 3 持松塚原 4 持松3号  
5 浦大間4号 6 石立

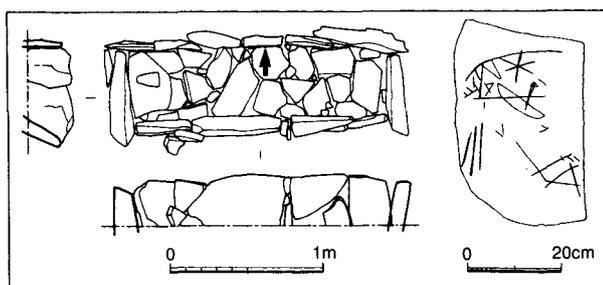


図3 線刻画のある箱式石棺図  
(大原9号石棺)

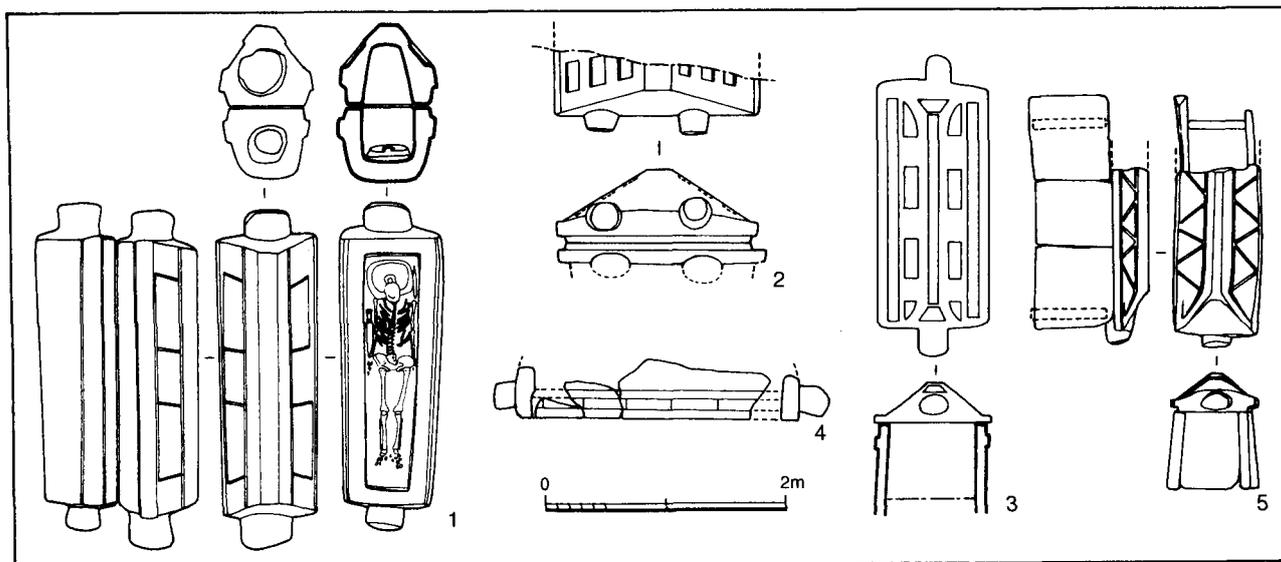


図4 加飾のある石棺図

- 1 経塚 2 持松塚原 3 持松3号 4 浦大間4号 5 石立

また同じ鹿央町にある浦大間4号石棺〔原口 1984 b〕は、浦大間3号石棺のところに破片として積んであった家形石棺2基のうちの1基で、詳細は不明であるが、「棺蓋に幅7～9cmの帯状の陽刻が棺身に平行して施されて」おり、持松3号石棺に類するものであった(図4-4)。

菊池郡西合志町の石立石棺〔隈 1984 b〕は、家形石棺で(図4-5)、「棺身は4枚の板石を組み合わせたもので、棺蓋は屋根形を呈する。主軸をほぼ東西に向け、棺身は内法153cm、幅53cm、深さ45cm、棺蓋は屋根形の削り貫きで、東側にのみ突起がある。(中略)棺蓋には上面の両側に線刻による並列三角文が描かれ、上から見た感じは突起を頭にした亀甲を想起させる。」

これらの石棺棺蓋に施された彫刻文は、装飾の一種ではあるが、装飾古墳に含めるには若干の問題があり、今のところ肥後の装飾古墳の数の中には石立石棺の並列三角文のみを含めている。しかしこれもその後のこの地域の装飾古墳とは系譜上で直接結びつけることができないので、装飾古墳に含めるべきではないのかも知れない。

## ②……………八代・天草の装飾古墳

肥後のやや南部に位置する八代市と、八代海（不知火海）を挟んで対峙した天草島の地域は、海を介して結ばれており、また早くから大陸との門戸も開けていたようで、肥後で最も早い段階で朝鮮半島から横穴式石室が導入された所の1つでもある（図5）。肥後の装飾古墳はこの地域で出現し、他の地域へ波及したものと考えられる。

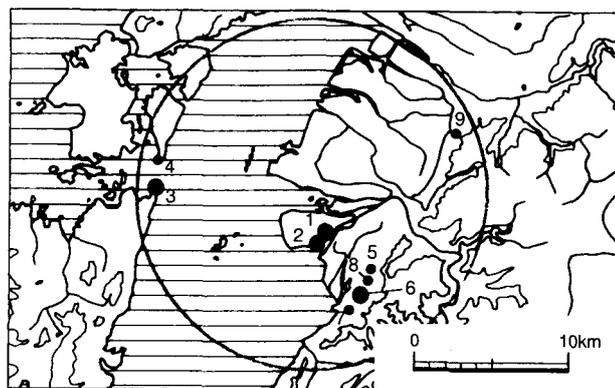


図5 八代・天草の装飾古墳位置図

- 1 小鼠蔵古墳群 2 大鼠蔵古墳群 3 大戸鼻古墳群  
4 広浦 5 五反田 6 田川内古墳群 7 竹ノ内  
8 長迫 9 門前2号

現在確認されている最古の装飾古墳は、八代市の小鼠蔵1号墳〔乙益 1984c〕である（図6）。球磨川河口に大鼠蔵山と小鼠蔵山があるが、古墳時代においては、この2つの山は海上に浮かぶ2つの島であった。小鼠蔵1号墳は、直径約8mの円墳で、主体部は単室の横穴式石室である。砂岩の切石を方形に組んで石障とし、その内部には切石2枚で併列に仕切った3つの区画が設けられている。中央の区画は奥に端石を挟み込み、蓋石まで被せているので箱式石棺そのままである。石棺の両側に設けられた区画は同じ規格で造られているが蓋石はない。石障のまわりは割石を持送り式に平積にし、その途中の高い位置に羨道を設け、さらに積み上げて天井石を乗せている。石棺を置くことから中央が最も中心となる被葬者の埋葬施設である。

装飾文様は石棺内の端石にあり、直径約7cmの円文1個が彫り窪められている。古墳の時期は、石室構造から最古段階の横穴式石室と考えられ、5世紀初頭に位置づけたい。なお、小鼠蔵3号墳も同じ頃の円文を持つ箱式石棺であるが、この地域の箱式石棺の装飾の系譜については、石室の後で述べることにする。

大鼠蔵尾張宮古墳〔隈 1984c〕は、小鼠蔵1号墳に次いで造られた装飾を持つ横穴式石室である。墳丘は自然丘陵を利用した円墳と考えられるが、古墳自体が尾張宮の社殿となっているので規模は不明である。石室は砂岩製の一枚石4枚を方形に組んで石障とし、その中を2枚の板石で仕切り3区画に分けている。奥と左右の石障には幅広で浅い2段のU字状挟り込みがあり、前石障には中央部だけ一段のU字状の挟り込みがある。石障のまわりは砂岩の板石を持送りで積み上げている。羨道から玄室に至るには段下がりであるが、天井近くにあった小鼠蔵1号墳に比べるとかなり下がった位置である。そうすると仕切の中央が通路となり、左右が屍床となる。

装飾文様は奥石障にあり、円文3個が等間隔に彫られている。石室構造から6世紀前半に位置づけられる。

八代地域で出現した装飾古墳は、次の段階には天草地域へと分布域が広がって行く。大戸鼻北古墳〔浜田 1917b, 隈 1984d〕は、天草郡松島町にある直径約25mの円墳で、砂岩の板石で築かれた単室の横穴式石室である。大鼠蔵尾張宮古墳と類似する石室構造であるが、より石障の高さが高くなっている。石障の上面の挟り込みは前石障だけにみられる。

装飾文様は、奥石障に円文が3個、左右石障に円文が4個ずつ並べて彫られている。この古墳は石障がより高くなっていること、装飾される面が増えていること等から、大鼠蔵尾張宮古墳より一段階新しい5世紀前半でも中葉に近い時期に位置づけたい。

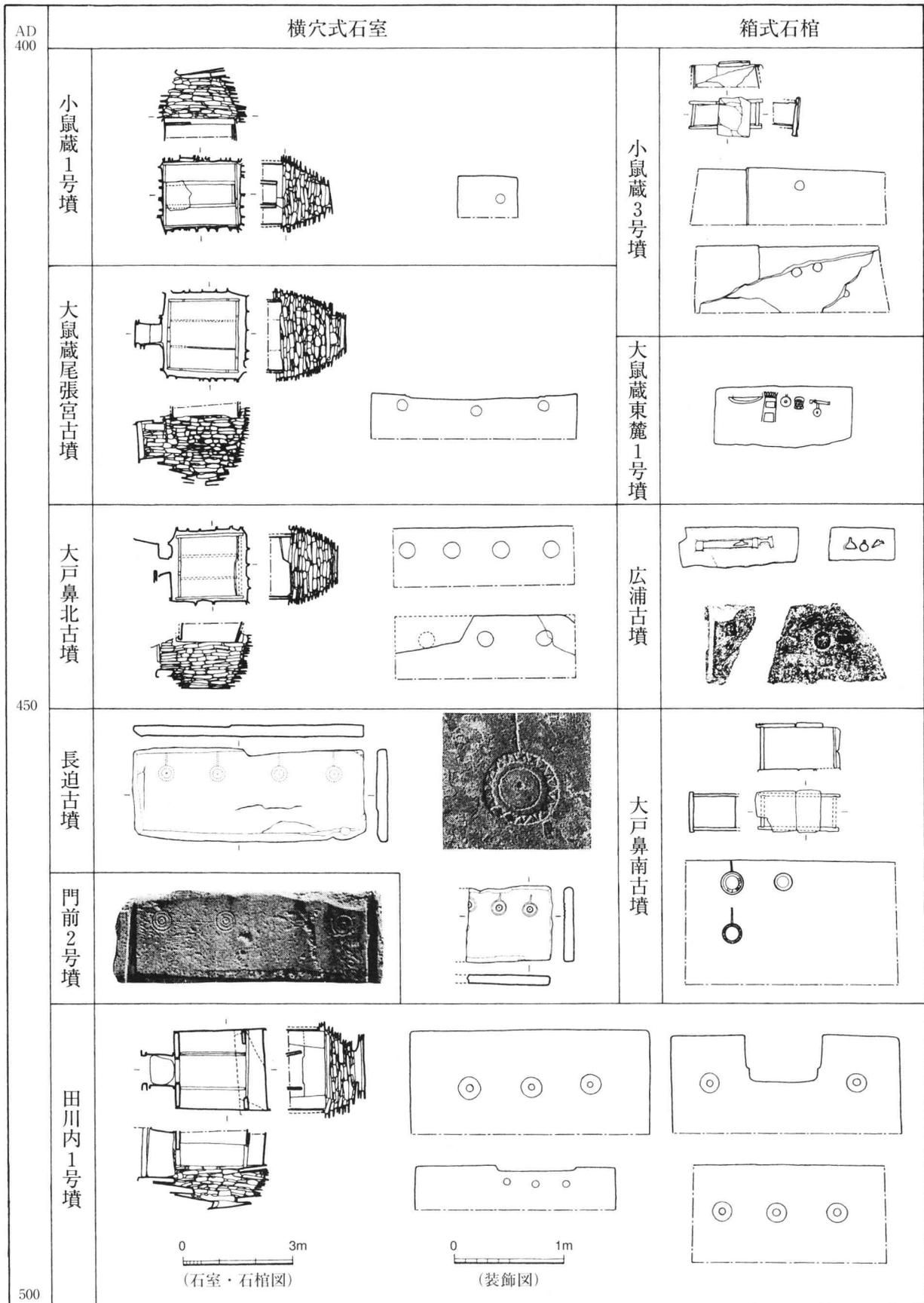


図6 八代・天草の装飾古墳編年図

八代市の五反田古墳〔佐藤 1984 a〕, 田川内 3 号墳〔佐藤 1984 b〕, 竹ノ内古墳〔佐藤 1984 c〕等の破壊された古墳も一重の円文が並んだ石材が確認されており, この頃造られた古墳と考えられる。

八代・天草地域で出現した装飾古墳は, 5 世紀半には宇土半島に広がり, 5 世紀後半には熊本平野へも波及する。一方, 八代・天草地域においては, 他地域の石室構造の変化と連動しつつも, 装飾文様は出現期からの文様である円文を主に施すという, 独自の文化を守り通す。

5 世紀後半の古墳と考えられるものに長迫古墳と門前 2 号墳がある。八代市の長迫古墳〔梅原 1917 a, 乙益 1984 d, 佐藤 1984 d, 佐藤 1984 e〕は, 明治時代の初め頃, 水田を開いた際に破壊されたが, 円墳であったと考えられる。現在, 砂岩製の切石 5 枚分が分散保存されている。それらを復元すると, コ字形屍床配置をした石障を持つ横穴式石室であったと推定される。

日奈久神社の長さ 2.15m ある石材は, 奥石障と考えられ, 現在装飾が消えているが, 京都大学の拓本によると, 中心孔を持つ 4 個の二重円文が等間隔に並べて彫られており, 各円文の上縁から垂下したように線が彫られていた。また, 東京国立博物館に小石材 2 枚と共に保存されている長さ 2.18m ある大きな石材は, 左石障と考えられ, 奥から 50cm 程のところの下半部に仕切石をはめ込む溝が彫ってある。この石材には 6 個の文様が並んでおり, うち 4 個は中心孔を持つ三重円文で外円と中円の間に鋸歯文を入れた彫刻である。他の 2 個は円文と同心円文である。これらの円文にも上縁から垂下した線が付いている。恐らくこれらの円文は, 鏡を吊り下げた状態をより具象的に表現したものとみることが出来る。その他, 中山義光氏宅にある石材破片と, 元角田政治氏所蔵の石材破片とは同一石材の破片で, 接合すると長さ 1 m 余りあり, 垂下した線に付けた中心孔を持つ二重円文が 4 個彫られており, 石障石材と考えられる。

このように長迫古墳は, コ字形屍床配置を持つ石障系横穴式石室と考えられるところから, 大戸鼻北古墳等よりも新しく位置づけることができ, 5 世紀後半に比定できる。

八代市の門前 2 号墳〔梅原 1919 a, 佐藤 1984 f〕は, 直径約 15m の円墳であったと考えられている。また破壊された石室の砂岩質石材が多数積み重ねてあったことから, 横穴式石室であったと考えられている。現在, 石室内の石障に使用されたと考えられる装飾を持つ長さ約 2.5m ある大きな砂岩製石材が近くの公民館に保存されている。石材の三辺に石材を組み合わせるための溝が彫られており, この石材を奥石障とみれば, 両端が左右石障をはめ込んでいたことになり, さらに下端に床石をはめ込む精巧な造りであったと考えられる。

装飾文様は二重円文 3 個の彫刻が並んでいる。左の 2 個は直線で結ばれており, 内外の円の間もいくぶん窪んでいるので三重円文にも見える。装飾文様や推定される石室構造から, 6 世紀後半の長迫古墳と前後する時期に造られたと考えられる。

石障系の装飾古墳は, 中央に箱式石棺を置いたものから, II 字形屍床配置へと変化し, さらにコ字形屍床配置へと変化する。そうなる奥屍床が最も重視される埋葬施設になる。その発展した古墳が田川内 1 号墳である。

八代市の田川内 1 号古墳〔梅原 1917 b, 佐藤 1984 g〕は, 規模は不明であるが円墳であったと考えられ, 現在は補修工事の際に復元された墳丘がある。主体部はすべて砂岩の板石で構築されており, 大きな切石 4 枚を立てて石障とし, その内側を仕切石 3 枚でコ字形に仕切っている。さらに奥屍床前面には袖石を立て, 奥屍床上面を覆う石棚を乗せている。前石障は入口部を 2 段の U 字形に

抉っており、石障が高くなり、羨道が低くなった分、深い抉り込みとなっている。奥屍床前面の仕切りにも浅いU字形の抉り込みがある。石障のまわりは、割合大きな割石を持ち送りで積み上げて天井石を乗せている。

装飾文様は、石障4壁と奥の仕切石前面にある。石障のうち奥と左右の3壁には二重円文3個ずつを等間隔に並べ、前壁は同じ文様を2個並べている。また通路奥にあたる奥仕切前面には小円文3個を並べている。その施文技法は彫刻よりも線刻に近くなっている。石室の内壁全体は赤く彩色されている。

田川内1号墳の石室は、羨道と玄室の床面の高さが同じになっており、石障が高く立ち上がり、前石障の抉り込みが深くなっている。また、奥屍床が石屋形状を成しているのが特徴である。後述の上益城郡嘉島町井寺古墳も奥屍床に石棚をかぶせ、羨門部石材の構築法などに類似するところがあり、時期的に近い頃に造られたと考えられる。また、同じく後述の宇土郡不知火町国越古墳の石屋形の初源的な形態とみることができる。装飾文様も彫刻よりも線刻に近いものになっている。このようなくつつかの理由により、田川内1号墳を5世紀末に位置づけたい。

なお、八代市の大鼠蔵西北麓2号墳〔江上 1984a〕は、破壊された際の記録によると、平石積の横穴式石室の石障に二重円文3個が刻まれているのが確認されており、田川内1号墳と同じ頃の古墳と考えられる。

次に、前述の線刻のある大原石棺群を除けば、八代・天草地域においてのみ分布している装飾のある箱式石棺について述べることにする(図6)。その最古の例は、装飾のある横穴式石室と同じく、八代市の大鼠蔵山にある小鼠蔵3号墳である。

小鼠蔵3号墳〔池田 1984〕は、小鼠蔵1号墳の西方約20mの地点の尾根の突端部にあり、本来墳丘はなかった可能性がある。4壁を砂岩製板状切石各1枚で築き、各長側壁の両端部には溝を彫り、短側壁を挟み込むようになっている。底石はない。蓋石は2～3枚の切石を使用していたようである。今は1枚のみ残っている。蓋石の裏面には、棺身の縁に合うように溝が彫られている。

装飾文様は、長側壁の内面両側にあり、一面には3個、もう一面には1個の円文が彫られている。円文は正円ではなく、ややいびつであり、大きさも同一ではなく、配置も自由である。時期は、類似する5号墳の箱式石棺から出土した土器から5世紀と考えられており、小鼠蔵1号墳と同じく5世紀初め頃の石棺とみられる。

隣の大鼠蔵山からも石棺が出土している。大鼠蔵東麓1号墳〔江上 1984b〕がこれで、墳丘はなかったようである。箱式石棺は土取工事中に発見されたため、規模や構造は明らかではないが、関係者の話を総合すると、板石9枚を組み合わせた箱式石棺であつたらしい。長側壁の一枚に装飾文様があるが、この石も他の石材とつなぎ合わせて使われていたものと考えられる。

装飾石材は砂岩製で、5種類の絵が並べて彫られている。左から弓、鞆、吊り下げた二重円文(鏡?)、短甲、太刀とそれに吊り下げた二重円文の順で並べられている。太刀に吊り下げられた二重円文も鏡であろうと考えられる。短甲は古い型式である三角板が表現されている。

この装飾が描かれた背景を考えるのに菊池郡西合志町上生上の原遺跡4号箱式石棺の遺物の出土状況(木崎康弘氏教示)は重要な示唆を与えてくれる。この石棺では、蓋石上面に残された鏝の跡と遺物の破片から、蓋石の上に三角板鋌留短甲と眉庇付冑及び短い鉄刀(又は剣)が乗せられてい

たことが分った。石棺の内部からも鉄刀や鉄鏃が出土している。恐らくこれらの副葬品は、被葬者の生前の所有物であり、被葬者の生前の勇姿を称えらると共に、被葬者の魂を鎮めるためおよび被葬者を悪霊から護るために副葬されたものと考えられる。そうであれば、大鼠蔵東麓1号墳の装飾も、副葬品を入れるのと同じ目的で描かれたものと解することができるのではなかろうか。

天草郡大矢野町の広浦古墳〔島田 1919 a, 乙益 1984 e〕は、大鼠蔵東麓1号墳と類似の装飾を持つ古墳である。この古墳は、かつて小形の円墳状で、上部に円形の石材が堆積していたと言われ、主体部は砂岩製の切石を組み合わせた箱式石棺で、内法の長さ約2 m, 幅約60cm, 深さ約60cm内外であったらしく、石材の組み合わせ部には溝が彫り込まれていた。

装飾のある石材は4個あり、いずれも絵のある部分だけを切り欠いて保存したものである。現在県立美術館にある第1石と第2石には、吊り下げた半円文、吊り下げた円文（鏡?）、刀子、大刀に重ねた刀子が彫られている。また京都大学にある第3石には、刀子と2個の円文が、現地に残され行方不明になっている第4石には、短甲が彫られていた。このうち、短甲、大刀、吊り下げた円文は、大鼠蔵東麓1号墳と共通する図柄で、その影響を見ることができる。大鼠蔵東麓1号墳と広浦古墳が造られた年代は、彫られた図柄から5世紀前半と考えたい。

なお、大鼠蔵東麓1号墳の靱と同心円文は、後述する宇土半島の装飾古墳で現在のところ最古である小田良古墳に採用される文様として注目される。

大鼠蔵東麓1号墳や広浦古墳の後に造られた箱式石棺が天草郡松島町大戸鼻南古墳〔浜田 1917 c, 隈 1984 e〕である。この古墳は、小墳丘の円墳であったと考えられ、主体部は砂岩製切石を組み合わせた箱式石棺で、長側石2枚には端部に溝を彫って短側壁と組み合わせ、底石も敷いている。棺蓋は3枚で構築してあったとみられるが、1枚は失われ2枚が残っており、その裏面にも組み合わせ溝が彫られ、丁寧な造りである。

装飾文様は片側の長側壁にある。中央上方に外円を太線、内円を細線で彫った二重円文、その左に外円と内円を太線、中円を細線で彫り、内円と中円の間に鋸歯文を入れた三重円文、さらにその下方に太線の間に鋸歯文を入れた二重円文が彫られている。なお、左の2個の円の上方には吊り下げた紐のようなものを2本線で表わしている。これらの文様は、鏡を写實的に表現したものと考えられる。この文様は長迫古墳の横穴式石室の石障に使われた石材に彫られたものとよく似ており、この箱式石棺の時期も5世紀後半の中でやや古い時期と考えられる。

なお、八代市田川内2号墳〔佐藤 1984 h〕の箱式石棺石材は、現在行方不明になっているが、側石に二重円文3個が並べて彫られていた。左の2個の二重円文は直線と弧線で繋がれ、その中に2個の山形文（連続三角文）を線刻してあった。この古墳も大戸鼻南古墳と同じ頃に造られたと考えられる。

八代市大鼠蔵東北麓2号墳〔江上 1984 c〕は、円墳であったと考えられ、主体部は板石9枚を組み合わせた箱式石棺であったという。昭和46年頃まで残っていた側壁には、二重円文3個が彫られていたが、行方不明になった。この二重円文は、田川内1号墳の石障に彫られたものと同じで、この箱式石棺の年代も5世紀末頃と考えられる。

八代・天草地域の装飾古墳は、田川内1号墳や大鼠蔵東北麓2号墳など5世紀末の古墳を最後として消滅するが、この地域の主文様である円文は、他域へ波及し、他の文様と共に発展し、興味ある展開を見せる。

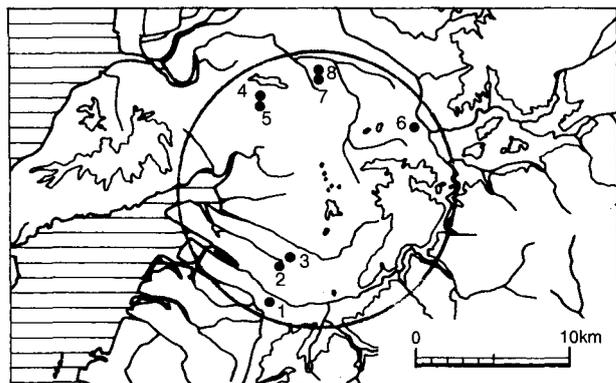


図7 肥後中・南部丘陵の装飾石棺位置図

- 1 大王山 2 大野村 3 竜北高塚 4 晩免  
5 潤野 6 中郡 7 石之室 8 北原1号

### ③……………肥後中・南部丘陵の装飾石棺

先に八代海の島々や海岸に面した所に分布している装飾のある石障系横穴式石室や箱式石棺について見てきたが、ここで述べる装飾のある石棺は、その背後の丘陵上から肥後中部のやや内陸にかけて分布している(図7)。このうちの2基の舟形石棺は、菊池川流域のものと同じく棺蓋に

方形区画を設けたもので装飾古墳に含めるべきものではないが、この地域においては装飾のある家形石棺に継承される要素もあるので、一緒に紹介したい。

八代郡宮原町大王山古墳〔乙益 1984 f〕は、山頂を利用した円墳で、割石小口積の竪穴式石室の中に、凝灰岩製の舟形石棺が納められていた。棺身には造付の枕があり、棺蓋は割れて半分しか残っていないが、端部には縄掛突起がある。また棺蓋の長側辺には復元すると左右対称に6カ所に穴があげられている。蓋頂部には平坦面があり、それから両側面にかけて平板な斜面となり、切妻造の屋根状を成す。その両斜面に長方形に浅く彫り窪めた装飾があり、恐らくもとは両面に合計4カ所あったとみられる。この舟形石棺は形態等から5世紀初め頃に比定できると考えられる。

E・S・モースが明治12年に九州旅行した紀行文に大野村石棺を紹介している〔E・S・モース 1917〕。八代郡竜北町大野貝塚の付近にあったと考えられ、スケッチによると、環状縄掛突起を4カ所に造り出した舟形石棺の蓋で、内面に亀甲状の長方形区画が彫り込まれている。大王山古墳と同様、装飾古墳には含めていないが、かなり装飾的な石棺である。大王山古墳の棺外面の長方形区画が棺内面に移行したのとして捉えることができるのかも知れない。5世紀前半でも中葉に近い頃の石棺と考えられる。

八代郡竜北町の竜北高塚古墳〔梅原 1919 b, 三島 1984 a〕は、大野村石棺の系統を引く石棺に、新たな装飾文様が加わったものとして注目される。竜北高塚古墳は、墳丘が著しく変形しているが、もとは直径約50m程の円墳であったと考えられ、主体部は凝灰岩切石で造られた組合式家形石棺である。破損・風化が激しいが、復元すると、屋根の両長側辺に合計6カ所の環状縄掛突起がある。

装飾は棺内にある。棺蓋の裏面には棟に当たる部分で二分された両側斜面に、彫り窪めた長方形が4個ずつ二段にみられ、小口に近い棺蓋裏面では方形に彫り窪めた中に円文の浮彫がある。棺身の長側壁は赤く塗られているだけで装飾はないが、両小口石には装飾がある。一方には横長の長方形に彫り窪めた中に浮彫の円文3個が並び、その両端の円文の上部には吊したような線がある。もう一方の小口石にも横長の長方形に彫り窪めた中に3個の浮彫があったと考えられるが、右側の浮彫は風化のため明らかでない。左側の浮彫は円文で、中央の浮彫は上部が風化しているが、下方の形状から鞆であったと考えられる。また長方形の区画外で円文の下部に当たるところに刀子の浮彫がある。

その他、凝灰岩製石枕が発見されている。頭の上方の位置に直弧文の一部を立体的に波状に表現したような突起帯があり、その頭の側の面にも直線と弧線の沈線文が部分的に残っている。

このように竜北高塚古墳の家形石棺は、方形区画の彫り窪みを設けるといって、大王山古墳や大野

村石棺の舟形石棺の伝統を引き継ぎつつも、その中に明らかな装飾文様を施している。その装飾文様は、円文・吊り下げた円文（鏡?）・刀子・靱?の浮彫で、大鼠蔵東麓1号墳や広浦古墳の箱式石棺に施されたものが取り入れられており、八代・天草地域の影響でこの装飾古墳が成立したことを如実に物語っている。また、天草郡大矢野町の長砂連古墳を始源とする直弧文がこの古墳の石枕に刻まれていることも重要である。竜北高塚古墳は、家形石棺の形態や施文技法・文様構成など総合して、5世紀半頃ないしその直後頃に造られたと考えられる。

宇土市晩免古墳〔梅原 1919c, 富樫 1984a〕は、墳丘が失われているが、円墳であったと考えられ、主体部は家形石棺である。石棺は埋め戻されているが、熊本県庁保管の図を引用した京都大学の報告により概要を知ることができる。それによると、凝灰岩製の組合式家形石棺と考えられ、棺蓋の両端に縄掛突起が付き、長側辺にも両側合わせて6個の環状縄掛突起が付いている。棺蓋の棟と軒の間は、横線で区画した中に縦線を入れて流れのある屋根を表現している。棺身の長側壁と短側壁（小口石）の各一面には、2個ずつの刀掛状の突起がある。長側壁の突起の右側には車輪状の円文の浮彫があり、短側壁には突起の下に円文が彫られている。

晩免古墳の車輪状文は、鏡の文様を省略して彫ったものと思われる。また刀掛状突起は、長砂連古墳との結びつきを示している。また家形石棺の棺は、竜北高塚古墳と同じく細身である。このようなことから、やはりこの家形石棺も八代・天草地域の箱式石棺や石障系石室の影響を受けながら成立したものとみられ、5世紀後半の古い時期に造られたものとする。

晩免古墳の南方約300mのところ潤野古墳がある。潤野古墳〔梅原 1919b, 富樫 1984b〕も元は円墳であったと考えられ、主体部は凝灰岩製とみられる組合式家形石棺である。京都大学の報告によると、棺蓋には両端に縄掛突起があり、長側辺の両側に合わせて4個の環状縄掛突起が付いている。棺身には、長側壁の一面に2個の刀掛状突起が並んでおり、その上に正面からみるとこの突起に架したように見える横長の長方形区画を作り、その中に鋸歯文を線刻している。また突起の間に2個の円文、突起の各々の下方に1個ずつの円文がある。その他、短側壁にも円文3個が並んでいる。これらの文様のうち鋸歯文は、5世紀前半と考える大鼠蔵東麓1号墳の短甲の彫刻の中に三角板の表現として出現し、その後、5世紀後半と考える長迫古墳や大戸鼻南古墳の吊り下げた同心円文（鏡?）の中や、田川内2号墳の二重円文2個を直線と弧線で結んだ中にも描かれている文様である。

潤野古墳は、棺蓋に縄掛突起と環状縄掛突起を持つこと、刀掛状突起を持つこと、円文を施していることなど晩免古墳と共通する点もあるが、環状縄掛突起の数が6個から4個に減少していること、棺が広幅になっていることなど新しい要素がみられ、5世紀後半の中頃に造られたと考えられる。

下益城郡中央町にある中郡古墳〔伊藤奎二 1984a〕は、低い墳丘を持つ円墳であったと考えられる。主体部は凝灰岩で造られた組合式の家形石棺であるが、やや構造が特異で、棺身の上縁から周辺に板状切石を一段敷きつめ、その上に2枚で構成した低い家形の棺蓋を乗せており、竪穴式石室の感じを受ける。棺蓋の長側辺の一方には、環状縄掛突起が退化して穴だけが残ったとみられる方形の穴が2カ所にあけられている。

装飾は棺身内壁にある。長側壁の両面には、各々3個の彫り窪めた円文を上下二段に配置してお

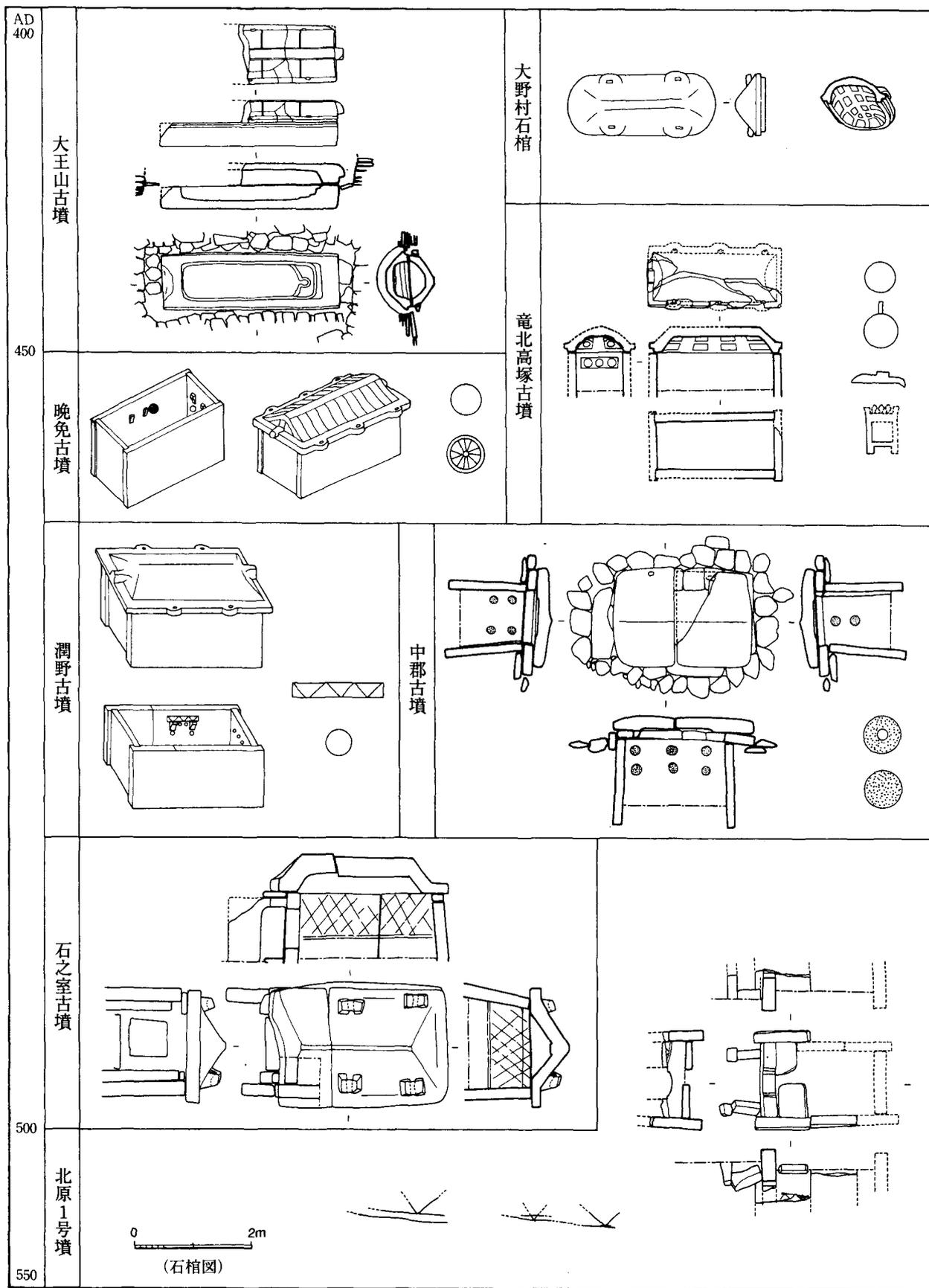


図8 肥後中・南部丘陵の装飾石棺編年図

り、うち一面の中央上方の円文のみは二重円文である。短側壁にも彫り窪めた円文があり、一方には2個を、他方には1個をそれぞれ二段に配置している。石棺の内壁全体は赤く塗られており、円文のみは黄色で塗られている。中郡古墳の時期は、文様が内壁全体に広がること、黄色の彩色が加わること、追葬が容易なように棺蓋を2枚の石材で構築していることなどから5世紀後半でも潤野古墳よりやや新しい時期に位置づけられる。

下益城郡城南町の塚原古墳群の中にある石之室古墳〔三島 1984 b〕は、直径約14mの円墳で、主体部は凝灰岩で造られた妻入横口式家形石棺である。棺身の長側石は、それぞれ2枚からなり、前後両端に小口石を立て、入口の小口石はその中を方形に刳り貫き開口部としている。羨道の両側にも1枚ずつの側石があり、開口部の前には敷石と立石がある。棺蓋は2石で寄せ棟の屋根形に造られ、奥の大石の屋根には左右それぞれ2個ずつの台形状突起に穴をあけた縄掛突起がついている。

装飾文様は、内部の奥壁と両側石にあり、いずれも下部に横走の沈線を2本巡らし、その上方を斜格子文の線刻で埋め尽している。この文様は、直弧文の省略形態であるX形文を多数重ねて描いた文様である。なお石之室古墳からはきぬがさの柄と考えられる石製品も発見されている。

石之室古墳の時期は、横口式家形石棺であること、環状縄掛突起から変化した突起が屋根部に付いていること、文様が線刻の斜格子文であることなどや、出土した遺物などから5世紀末と考えられる。

石之室古墳のある塚原古墳群から、もう1基の装飾のある凝灰岩製で妻入横口式家形石棺が発見された。北原1号墳〔清田ほか 1986〕で、破壊が著しかったが、小形の円墳であったと考えられ、残った石材の一部と石材を立てていた溝の痕跡から、規模や石材配置などをほぼ推定することができた。棺身の長側壁は、左側は2～3枚、右側は2枚で構築され、左側は接合部でずれがみられる。前後の小口石はそれぞれ1枚石で、入口は刳貫玄門で、下部は有段のU字形に刳り貫かれている。羨道部は、各1枚の側石と、その前に角柱状の立石が見られた。棺蓋はなかったが、類例から屋根形を成すことは明らかである。復元による内法は、幅1.28m、奥行1.66mで、石之室に比べると小型で、方形に近くなっている。

装飾文様は、内面の入口小口壁と左長側壁にあるが、上端を欠損した石材にかろうじて文様の一部が残るものである。いずれも赤く塗られた石材に横送する二本の沈線を引き、その上方に連続三角文のようなものを施しているが、ラフな線刻である。なお、この古墳の前庭部からは盾形石製品が発見されている。

北原1号墳は、石棺の形態、施された装飾文様、石製表飾を持つことなどから、石之室古墳の系譜を引くことは明らかであり、石棺構築技法や施文方法などからみると、かなり雑になって来ており、退化現象がみられる。以上のような点からと出土遺物から、報告者に従い、北原1号墳の時期を一応6世紀の半頃としておきたい。家形石棺では最後の装飾古墳である。

## ①……………宇土半島の装飾古墳

宇土半島は、熊本県の中程から天狗の鼻のように海へ突き出ており、海との関わりの強い地域であるところから（図9）、古墳の壁面にも被葬者の生前の活動を物語るように舟の線刻を描いたも

のが多くみられる。

宇土半島で最古の装飾古墳は、宇土半島先端にある宇土郡三角町の有明海に面した側にある小田良古墳〔江本 1984〕である。この古墳は墳丘及び石室上部とも流出しているが、円墳であったと考えられ、主体部は単室の横穴式石室である。砂岩製の板石4枚を方形に組んで石障とし、そのまわりに板石を積み重ねている。石障の内側は、砂岩製板石2枚で仕切り、Ⅱ字形に屍床を配置している。前石障中央部と2枚の仕切石中央部には、U字形の抉り込みがあり、石室入口と屍床入口を表現している。

装飾文様は、石障の4壁にみられる。各壁とも平行する2本の線を入れた中を文様帯としており、奥壁には中央に同心円文、その左右に盾、その外に同心円文、両端に鞍の順で対称に彫刻文を施している。この同心円文は上下に2本の直線を入れ、固定したように表現している。他の3石障は、全てこの同心円文のみを施しており、左石障に4個、右石障に3個、前石障に2個が彫られている。なおこれらの石障は全面赤く塗られていた。

小田良古墳は、八代海周辺の石障系石室の系譜を引くもので、直接的には長砂連古墳や大戸鼻北古墳の影響を強く受けている。また文様の同心円文と鞍は、大鼠蔵東麓1号墳の箱式石棺のものを取り入れている。小田良古墳の年代は、石室構造や、彫刻文を赤色のみで彩色していることなどから、5世紀半頃に位置づけられよう。また小田良古墳は、後述する直弧文系の装飾古墳である熊本市の千金甲古墳の成立にも、石室構造や文様の上で影響を与える重要な古墳である。

小田良古墳の後に造られた装飾古墳として、宇土市のヤンボシ塚古墳〔高木恭二ほか 1986〕がある。ヤンボシ塚古墳は、宇土半島のやや基部寄りの有明海側にある直径約20mの円墳で、主体部は石障系横穴式石室である。内部は破壊を受け、前石障と左石障のみ残るが、痕跡から4枚の凝灰岩板石を組み合わせた長方形の石障で、奥に長いことから、その内部をコ字形屍床配置に仕切っていたものと考えられる。前石障の中央部にはU字形の抉り込みがあり、前石障と入口扉右の間には、両側に袖石が立っている。石障のまわりには安山岩を小口に積み上げて石室を築いており、下部と上部にはやや大きめの割石を用いている。

装飾文様は2種類ある。石障の装飾は左石障にあり、陰刻の円文2個が並んでいるのが確認でき

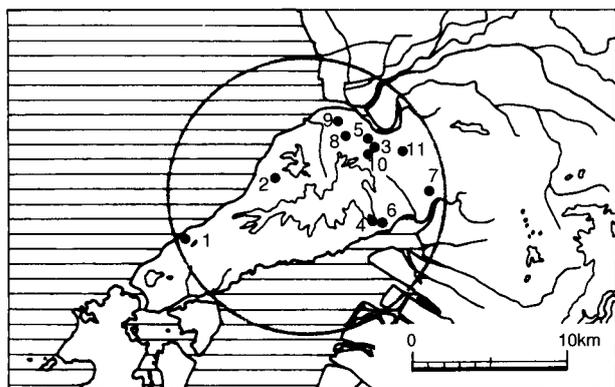


図9 宇土半島の装飾古墳位置図

- 1 小田良 2 ヤンボシ塚 3 東畑 4 桂原1号  
5 椿原 6 桂原2号 7 不知火塚原1号 8 城塚  
9 梅崎 10 飯又 11 宇土古城

るが、石材を復元すると、本来は3個並んでいたと考えられる。恐らく、右石障と奥石障にも同様な装飾があったものと考えられる。もう一種の装飾文様は、線刻文で、3カ所にみられる。入口左袖石の内壁面の線刻は、ゴンドラ形の舟に帆柱状の垂直な柱を立て、その上端に三角巾状の旗のようなものを表している。玄室左側壁の安山岩積石の1カ所にも、同様の舟を少し大きく描いている。左側壁の他の1カ所には、どのような意図で描かれたのか不明であるが、矩形の線刻がみられる。

ヤンボシ塚古墳は、円文の彫刻と舟の線刻が併用されており、この地域における最古の舟の線刻のある古墳である。石室は、石障系横穴式石室であるが奥に長い。また、前石

障、玄門部構造、扉石、羨道部の構築状態は、6世紀前半と考える国越古墳の前段階の形態として捉えることもでき、ヤンボシ塚古墳を5世紀後半に位置づけておきたい。

ヤンボシ塚古墳の後に続くものとして、桂原1号墳があるが、両古墳の間には石室構造上やや時間的な隔りがあり、この間をつなぐ古墳があると考えられるが、今のところはっきりした古墳は確認されていない。ただ半埋没状態の宇土市の東畑古墳〔平山 1984 a〕は、奥壁に石棚を架し、線刻文を持つ横穴式石室であり、その間を埋める古墳である可能性がある。

桂原1号墳〔三島 1984 c〕は、宇土半島基部の八代海に面した宇土郡不知火町にある。直径約13mの円墳で、主体部は単室の横穴式石室である。玄室は安山岩で築かれ、奥壁と左右壁は巨大な割石を腰石として据え、奥には石棚を架し、その上に割石を積み上げて天井石を乗せている。玄門は凝灰岩切石2枚を合わせて中央を方形に割り貫いたいわゆる割貫玄門である。

装飾文様は、彫刻と線刻がある。彫刻は1カ所だけで、奥壁の石棚の上方の石積みにあり、風化して白っぽくなった安山岩の岩肌を削り取って黒っぽい地肌を出すという方法で、黒の二重円文を描いている。線刻はすべて舟で、玄室の4壁と石棚の上面及び羨道左壁等に多数描かれている。その中には帆に順風を受けて進む舟や、沢山の櫂をおろした舟などもある。

桂原1号墳は、円文の彫刻と舟の線刻の両者を描いている点では、ヤンボシ塚古墳の影響を残している。また割貫玄門は大野窟古墳にあり、それに先行する国越古墳の大きくU字形に挟り込んだ前石障も類似点がある。その他、石棚を奥壁と左右壁の腰石に架しているのは、国越古墳や宇賀岳古墳や大野窟古墳に家形の屋根を架したものと共通するもので、石材の関係で石棚にしたものと考えられる。ここでは桂原古墳の時期を6世紀の前半の新しい頃ないし6世紀半頃と考えておきたい。

最近、宇土市で椿原古墳が調査され、桂原1号墳と同じような割貫玄門があり、石室構造も似ていることが分った。また装飾文様も円文の浮彫1個と帆掛け舟や木の葉などの線刻があるのが分った。ただ石棚はなかったと考えられ、桂原1号墳よりやや新しい古墳と考えられた。報告書の刊行が待たれる。

桂原1号墳のすぐ近くに桂原2号墳〔平山ほか 1984 b〕がある。墳丘はなくなり、石室も基底部の玄門や安山岩腰石だけが残っている。石室は単室の横穴式石室で、玄門は安山岩の袖石を立てている。石棚はなかったと考えられる。

桂原2号墳の羨道部左側壁には、線刻で一艘の舟が描かれている。中央に帆柱を立て、帆を張り、その後には三角形の旗状のものが描かれている。舟の後方には乗降施設と考えられるものに階段状の文様が刻まれている。また舟の下には半円状の波頭を2段に現わし、航海する様子が描かれている。

同じ不知火町にある不知火塚原1号墳〔三島 1984 d〕は、桂原2号墳と類似の石室であるが、玄室が奥にいくぶん長くなっている。羨道は玄室よりいくぶん幅が狭くなっているため玄室と区別されるが、玄門の袖石は省略されている。装飾文様はすべて線刻で、玄室の左右壁、玄門上部の眉石、天井石、羨道左壁にあり、不明の文様が多いが、玄室右壁の線刻は帆柱を立て櫂をつけた舟と木の葉文が描かれている。

桂原2号墳と不知火塚原1号墳は、石室の構造や装飾文様の中の円文彫刻が見られなくなっている点などから、桂原1号墳より新しく位置づけることができ、年代的には6世紀後半と考える。

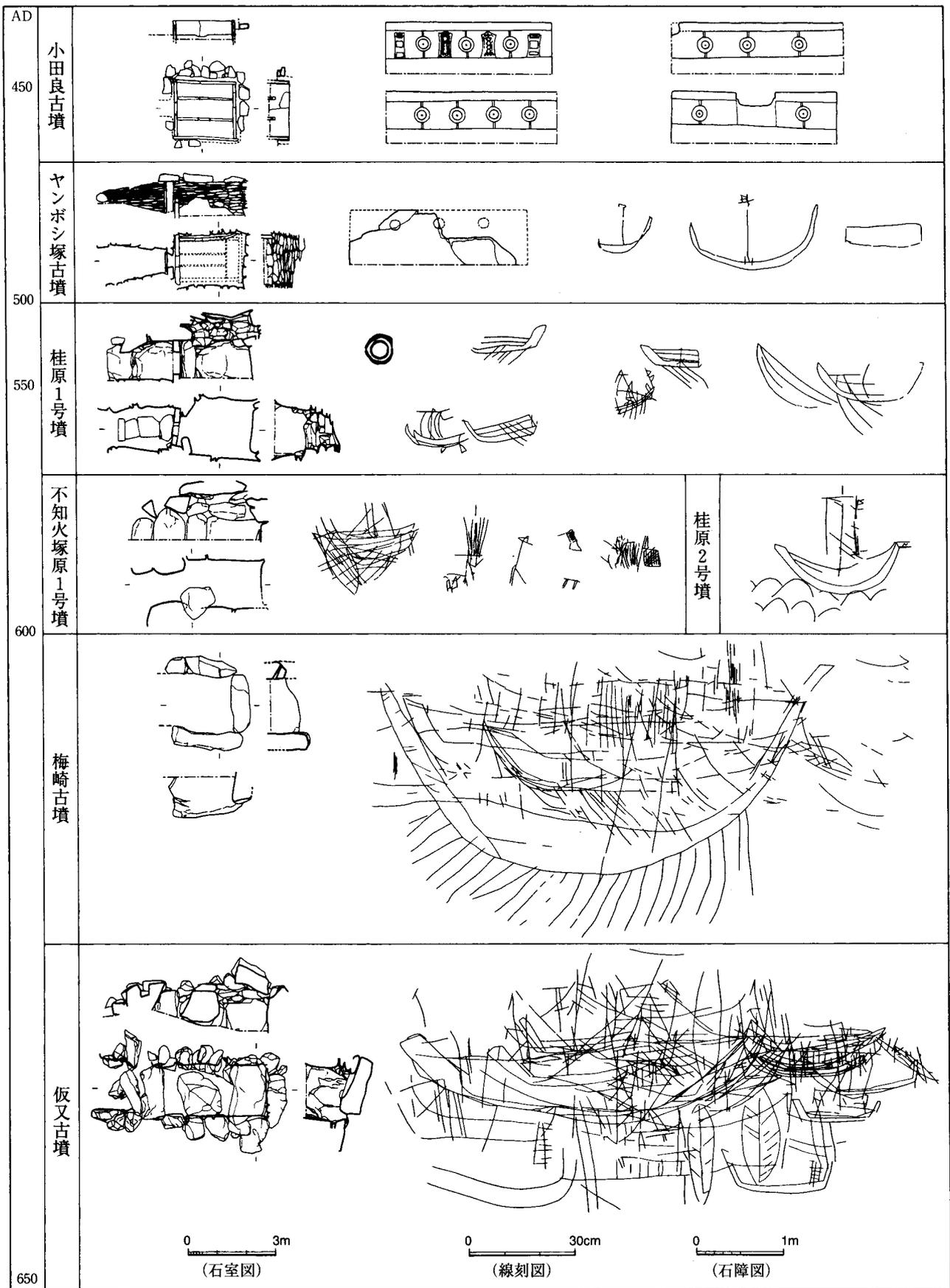


図10 宇土半島の装飾古墳編年図

なお、宇土市の城塚古墳〔平山 1984 c〕も線刻文のある横穴式石室で、この頃の古墳と考えられたが、未調査のまま破壊されてしまった。

宇土市の梅崎古墳〔富樫 1984 c〕は、宇土半島基部の有明海に面した丘陵上にあり、墳丘は流出してしまっているが、円墳であったと考えられる。主体部は横穴式石室であるが、破壊が著しく、玄室の奥壁と左右壁の安山岩腰石が残るだけである。その右壁腰石に線刻文がある。主線刻は、長さ129cmの大きさに描かれた1隻の舟で、船底には20本余りの櫂の線が描かれている。この舟の上方にも2、3隻の舟が描かれている。この古墳の時期は、石室羨道側の構造が不明のため決め難いが、装飾文様からみて、次に述べる仮又古墳と近い年代が考えられる。

宇土市の仮又古墳〔平山 1984 d〕は、直径約14mの円墳で、東と北には3段の外護列石が巡っている。主体部は単室無袖の横穴式石室で、石材は安山岩の巨石を用い、一部に凝灰岩を使用している。天井には3枚の安山岩巨石を架していたが、ずれてしまっている。装飾文様は、玄室の左右壁に舟の線刻があるが、左壁のものは追刻の恐れがある。右壁のものは約10隻の舟群と木葉文を無造作に重ね合わせて描いている。

仮又古墳は、羨道と玄室が同じ幅で境がない単純な石室であり、不知火塚原古墳などよりも後出すると考えられる。出土した須恵器により7世紀前半に位置づけられている。大小の舟を重ねて描くという点では、梅崎古墳も共通しており、同じ頃の古墳と考えられる。

## ⑤……………肥後中部の直弧文を施す装飾古墳

直弧文を施す装飾古墳は、天草島から宇土半島及び熊本平野周辺部にかけての地域、巨視的に見れば、肥後の中央部に展開している(図11)。

最古のものは、天草郡大矢野町にある長砂連古墳〔乙益 1984 g, 下林 1984, 伊藤玄三 1984〕である。長砂連古墳は、墳丘規模は不明であるが、円墳であったと考えられ、主体部は単室の横穴式石室である。凝灰岩製板石4枚を方形に組み合わせて石障を造り、元はその中に砂岩製仕切石2列を立てて、中央を通路とし、両側に屍床を設けていた。さらに右屍床の奥には小さく仕切った一角があり、ここには副葬品が納められていた。前石障の中央はいくぶんU字形に抉られており、羨門には左右に板石が立てられていた。また石障のまわりは、砂岩製板状割石を平積みにして石室を築いてあったが今は失われている。なお、右石障には2個ずつ2段に方形の刀掛状突起が設けられている。

装飾文様は、左右の石障に描かれている。右石障には、接続形の直弧文が3個彫刻され、両側に直弧文A型、中央に直弧文B型が配置されている。左石障には、3つの文様区画があり、中央には方形区画の中に対角線文と円文が重ねて彫刻され、その左右には直弧文A型が配置されており、3つの区画の上縁には梯子形文が帯状に彫刻されている。なお石障全体が赤く塗られている。

長砂連古墳の凝灰岩の石障は、宇土半島基部で切り出して運ばれていることが分っており〔高木恭二 1995〕、背景にある政治権力を窺わせるものである。またこれ以後の直弧文を施す装飾古墳の全てが他の古墳より突出した存在であることも注目される。

長砂連古墳が造られた時期は、Ⅱ字形に屍床が配置されていること、前石障のU字形抉り込みが

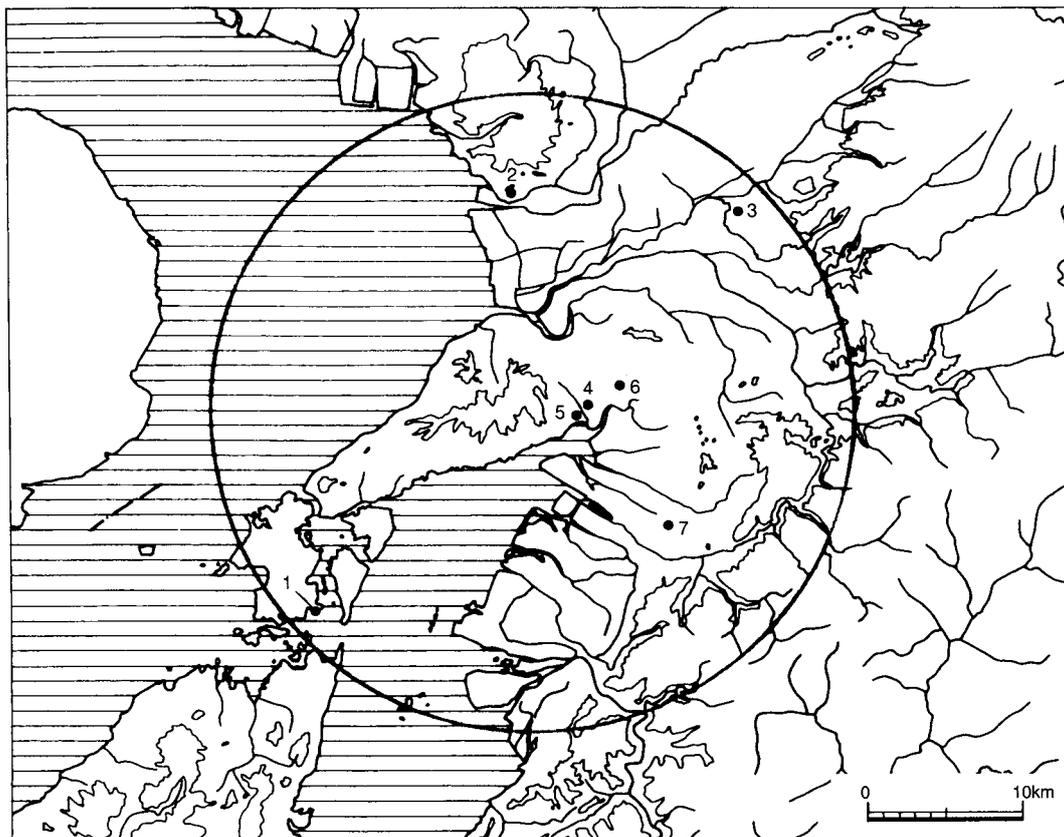


図11 肥後中部の直弧文を施す装飾古墳位置図

1 長砂連 2 千金甲1号 3 井寺 4 鴨籠 5 国越 6 宇賀岳 7 大野窟

浅いこと、直弧文を彫刻（浮彫）で表わし、全面赤く塗られていること等から、古い様相を伺うことができる。他の古墳と比較して、5世紀半をやや遡る時期に造られたと考えられる。

直弧文を施す装飾古墳は、その被葬者の勢力範囲の広さを誇示するように代が替わるごとに遠距離を移動して造られている。長砂連古墳の後に続くものとして確認されているのは、熊本市にある千金甲1号墳である。

千金甲1号墳〔三島 1984e〕は、直径約12mの円墳で、主体部は羨道の長い横穴式石室である。石障を凝灰岩切石で方形に組み、その中をコ字形に仕切っている。前石障の中央部及び奥屍床の仕切石中央部にはU字形の挟り込みがある。石障のまわりの石室は、安山岩板石を小口積で持ち送って築き、天井石を乗せている。

装飾文様は、奥石障、左右石障及び奥の仕切石前面にみられる。左右石障は、横線4本で、2段の文様帯を設け、その中を縦線によって文様区を分け、そこに同心円文とX形文（対角線文）を交互に並べて彫刻し、赤・黄・青の3色を使って美しく彩色している。奥石障も左右石障と同じ文様を彫刻し、その対角線文の部分に上下2段の文様帯に渡った靱を彫刻し、全部で4個並べている。彩色は3色に加えて緑も使われている。奥仕切石は、U字形挟り込みに添って舟底形の溝を入れ、その下に二重の半円と垂下線を施し、それを中心に左右に二重円文3個ずつを配置し、青・赤・黄の3色を使って塗り分けている。

この古墳の石障にあるX形文と同心円文の繰り返し文は、長砂連古墳の左石障にあった直弧文と円文を並べた文様の直弧文から弧線を取り除いて、交互に2段に並べた文様であり、直弧文の古墳の系列に属する古墳である。この古墳には、小田良古墳の影響もみられる。それは小田良古墳の奥

石障の同心円文の間に靱と盾を配置していたのが、靱のみに変化したもので、配置も似か寄っている。恐らく、長砂連古墳と小田良古墳の両者の装飾文様の合体したものととして千金甲1号墳の装飾文様が完成したものとみられる。

千金甲1号墳は、熊本平野北部における最古の装飾古墳で、初めて赤以外の彩色も用いられた古墳である。またこの地域で最古段階の横穴式石室で、コ字形屍床配置をとる最初の古墳でもある。このような意味で、その後のこの地域の古墳のあり方に及ぼした影響は大きく、重要な古墳である。また、この古墳の石障などに用いられた凝灰岩は、宇土半島基部から運ばれていることがほぼ明らかになってきた〔高木恭二 1995〕。このことはこの古墳の性格を表わすものとして注目される。千金甲1号墳の時期は、5世紀後半と考えられる。

なお、千金甲1号墳と同じ頃造られたものとして、下益城郡城南町の坂本古墳〔梅原 1919 d, 三島 1965, 三島 1984〕がある。すでに古墳・石材とも消滅しているが、コ字形に屍床を配置した石障系の横穴式石室で、凝灰岩製の奥石障には同心円文の彫刻が並んでおり、赤の彩色が認められたという。直弧文は施されていないが、凝灰岩の石障を持ち、千金甲1号墳と似た同心円文を彫刻していることから、直弧文系列上の古墳か、これに近い関係にある古墳と考えられる。時期的には千金甲1号墳と同じ頃か、赤の彩色のみであれば、やや古い可能性もある。

千金甲1号墳や坂本古墳の後に造られた直弧文系装飾古墳は、井寺古墳と鴨籠古墳である。

井寺古墳〔浜田 1917 d, 乙益 1974, 乙益 1984 h〕は、熊本平野の東部、上益城郡嘉島町にある直径約28mの円墳で、主体部は石障を持つ横穴式石室である。凝灰岩の切石を長方形に立て巡らして石障とし、もとはその中をコ字形に仕切ってあった。前石障は大きくU字形に抉って入口として入っている。千金甲1号墳より奥行が長くなった分、奥屍床が面積を増し、重視されたようで、現在は割れているが、もとは奥屍床上部を覆った石棚が乗せられていた。石障のまわりには煉瓦状に整えた凝灰岩切石を持ち送りで積み上げ天井石を乗せている。天井石は2枚合わせて長楕円形に抉った巨石で造られている。石室の左右両壁と奥壁の石障の直上には刀掛状の突起が2個ずつみられる。

装飾文様は、すべて直弧文を主とする幾何学文様で、石障内壁をはじめその上面、石棚の前面、羨道の両側壁、入口の両袖石、石梁の表面など各所に線刻されている。特に石障内壁の文様は、梯子形文や柱状文で囲んだ中に、車輪文や直弧文A型やB型を一定の順序に描いている。また石障の上面や前石障のU字形抉り込み部には、鍵ノ手文が連続して描かれている。これらの線刻文様は、赤・青・白・緑の4色で塗り分けられ鮮やかであったが、今は退色が激しい。

井寺古墳の時期は、千金甲1号墳の段階で出現した奥屍床がさらに発展し、石棚を設けていること、石室が切石積であること、線刻で描いた文様を彩色していることなどから、千金甲1号墳より新しい5世紀末と考える。なお、この古墳の石室を構築した石材のほぼすべてが、遠く宇土半島基部から運ばれているらしい〔高木恭二 1995〕ことは重要である。

鴨籠古墳〔梅原 1917 c, 三島 1984 g〕は、八代海側に面した宇土半島基部の宇土郡不知火町にあり、直径25m以上の円墳であったと考えられている。主体部は砂岩製の長大な切石4枚を立てて長方形の石室を造っているが、開口部はなく、上部構造も不明である。その石室内に、やや一方に片寄って凝灰岩製の家形石棺が安置されていた。家形石棺は、棺蓋・棺身ともそれぞれ一大石を削り貫いた刳貫式石棺である。棺蓋は大破していたので不足分があるが、本来は長側縁に環状縄掛突

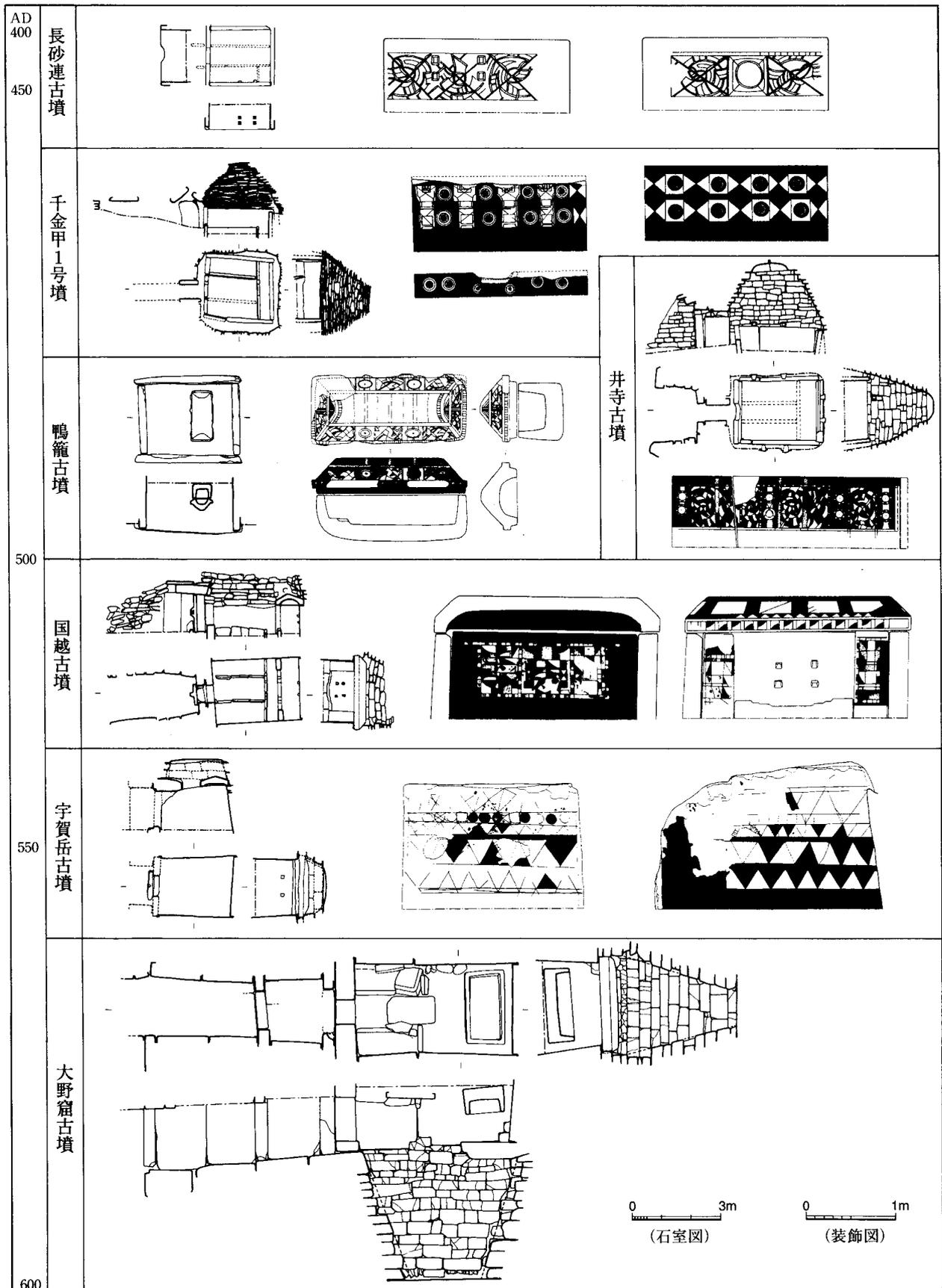


図12 肥後中部の直弧文を施す装飾古墳編年図

起が2個ずつあったと考えられる。

装飾文様は、線刻で棺蓋全面に施されている。頂部には2条の線と1条の線で8個の長方形区画を作り、長側部斜面は各2条の線で5分割し同心円文と半截直弧文を交互に施文している。短側部(妻側)は5条の線で2分割し、それぞれに半截直弧文を施している。なおこれらの直弧文はすべてB型である。その他、長側部両端部及び長・短側部の上面と同外側面には梯子形文が施されている。なお、これらの装飾は、現在は退色してしまっているが、以前は赤と青で美しく彩色されていた。

鴨籠古墳の時期は、線刻文の上に彩色していることから、千金甲1号墳の彫刻に彩色したものより新しいと考えられる。また、長方形に組んだ板石は、石障とも見ることができ、その一方(奥)に片寄って横向きに置かれた家形石棺は、石屋形へ発展する前段階ともみれる。このようなことから鴨籠古墳の年代を5世紀末に位置づけたい。

恐らく装飾文様や技法から、井寺古墳と鴨籠古墳は、相前後して造られたものと考えられる。

6世紀代に入ると考えられる直弧文系装飾古墳は、鴨籠古墳と同じく、宇土半島基部の宇土郡不知火町にある国越古墳〔乙益 1984 i〕である。国越古墳は、全長62.5mの前方後円墳で、主体部は単室の横穴式石室である。この石室の特徴は、4壁をそれぞれ巨大な凝灰岩製の一枚石で造り、それを腰石として凝灰岩製切石を積み上げていることである。また前壁の板石は中央部入口をU字形に挟り込み、明らかに石障から腰石への発展が分ることである。石室の奥には、袖石を立て、三方の腰石上に家形の屋根を架した石屋形が造られている。石室内は、石屋形、その前の副床、左右の屍床がそれぞれ仕切石で区切られている。なお奥壁には2個ずつ2段に刀掛状突起が造られている。また羨門には把手をつけた閉塞石が立てられている。

装飾文様は、石屋形の屋根、奥壁、両袖石の前面に施されている。屋根は斜面を4区に区画し、その下には小さな連続三角文を線刻しており、軒には方形区画を並べその中に直弧文の一種である鍵ノ手文を描いている。奥壁と両袖石も、梯子形文で区画した中を鍵ノ手文で埋め尽くしている。これらの線刻文は赤・青・白・緑で塗り分けてあり、その配置は荘麗である。

国越古墳の時期は、石室が石障系石室の変化したものであること、奥の石屋形は井寺古墳の石棚と鴨籠古墳の家形石棺の屋根が合体したような形で発生していること、文様が直弧文そのものではなく梯子形文と鍵ノ手文が施されていることなどから、井寺古墳や鴨籠古墳より新しい時期と考えることができ、6世紀前半に位置づけられる。

国越古墳の後に造られたとみられる古墳が、宇賀岳古墳〔島田 1919 b, 勢田 1984〕である。宇賀岳古墳は、宇土半島基部の下益城郡松橋町にあり、墳丘は流出していたが直径20m程の円墳であったと推定され、主体部は単室の横穴式石室である。奥壁と左右壁にそれぞれ凝灰岩の一枚石を立て、奥壁はもう一枚の石を重ねて高さを合わせ、3壁に架して家形の屋根を乗せ石屋形としている。この石屋形には袖石はない。奥壁には2個の刀掛状突起が設けられている。石室上部は凝灰岩切石を3段程積み上げていたとみられ、天井石は内面を少し挟り、上面を家形にした巨大な凝灰岩製一枚石を乗せている。羨門は復元すると中央に框石を据え、切石の袖石を立てていたと考えられる。

装飾文様は、奥壁と左右壁にみられる。奥壁には横線で区切った5段の文様帯がある。1段目は平行四辺形に対角線を引いたような文様、2段目は円文、3段目から5段目までは大小の連続三角

文をそれぞれ線刻している。左壁には4段の文様帯がある。4段とも大小の連続三角文を並べているが、一段目の大きな三角文の下辺のところには三角文と重なって梯子形文の線刻がある。右壁には左壁と同じような線刻が描かれているが、消えかかっている。これらの線刻文は、濃い赤、薄い赤、緑で彩色されている。

宇賀岳古墳の時期は、国越古墳の系譜を引いた石室構造を成すものの石屋形の袖石が省略され、屋根の装飾もなくなっていること、壁面の装飾も、円文や梯子形文、対角線文（X形文）はあるものの、三角文が主文様となっていることなどかなり変化しているので、6世紀前半の新しい時期ないしは6世紀半頃に位置づけられる。

直弧文は確認できないが、これらの直弧文系石室の延長上にある古墳として大野窟古墳を捉えたい。

大野窟古墳〔三島 1984h〕は、八代郡竜北町にある直径約39mの円墳と考えられているもので、巨大な複室の横穴式石室を主体部としている。石室の用材は殆んどは凝灰岩の切石で、玄室は奥壁1枚、左右壁各2枚の板石を立て、その上に切石を持ち送り式に高く積み上げ、天井石を乗せている。玄室の奥には、腰石に架した変形屋根形の石棚があり、その下には刳貫式石棺が設置されている。石棺の蓋石は欠失しているが、破片から家形を成していたことが分る。玄室の左右には、床と仕切が一石で造られた屍床が設けられている。左右屍床と奥の石棺との間には、空間があり副床が設けられていたと考えられる。この玄室の屍床配置や石室構築法などは、国越古墳と類似している。玄門は一枚石の中を方形に刳り貫いたいわゆる刳貫玄門で、その前には左右ともう一石の羨門袖石が立っている。これも国越古墳のU字形に挟り込んだ玄門の前に袖石が立っているのと類似している。前室と羨道は、壁面・天井石ともすべて巨大な板石を組み合わせで構築している。

装飾文様は、剝落が激しいので識別困難であるが、壁面の数カ所に赤及び白の塗彩が認められる。

以上のように大野窟古墳は、直弧文系の石室の延長上にあり、その系譜を引くものと考えられる。また、線刻文を彩色した国越古墳や宇賀岳古墳の後に続く彩色のみで描いた装飾文様であり、6世紀後半の古墳と考えられる。

## ⑥……………熊本平野南部の装飾古墳

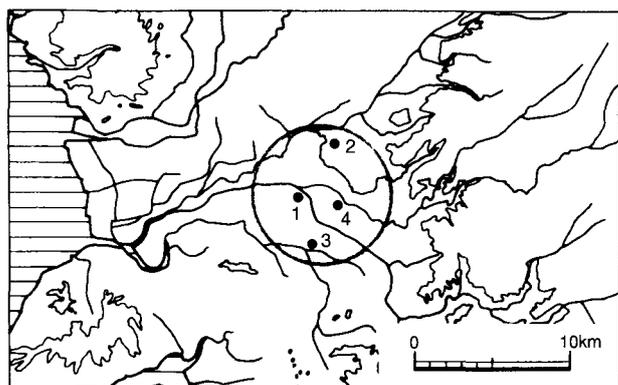


図13 熊本平野南部の装飾古墳位置図

1 坂本 2 井寺 3 甚九郎山 4 今城大塚

熊本平野の南部の緑川流域にいくつかの装飾古墳が分布している（図13）。

最古のものは、下益城郡城南町の坂本古墳である。概要はすでに述べたとおり石障系横穴式石室の石障に、同心円文が彫刻されているもので、5世紀後半の古い時期の古墳と考えられる。

坂本古墳に続くものが上益城郡嘉島町の井寺古墳である。この古墳についても先に述べたとおり、石障系横穴式石室で、コ字形に屍床を配置し、奥の屍床上には石棚がついている。石障などに直弧文や車輪状文等を線刻し、美しく彩

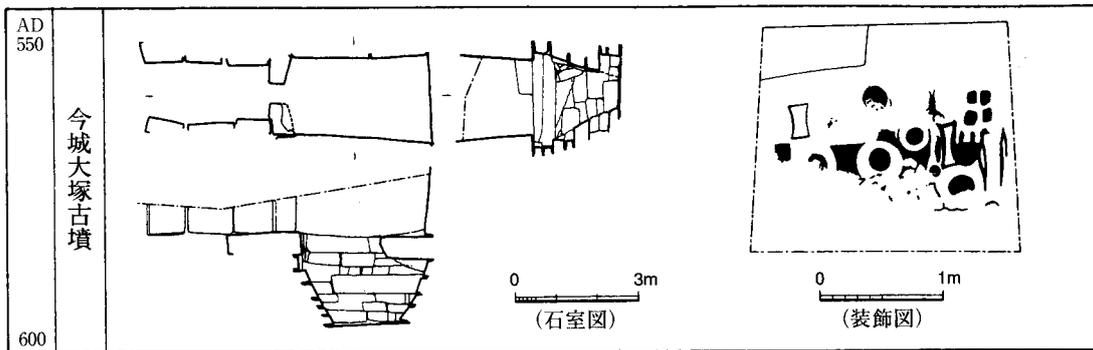


図14 熊本平野南部の装飾古墳編年図

色されており、5世紀末に構築されたものと考えられる。

以上の2基の装飾古墳は、直弧文ないしそれに関係のある文様を描いており、系譜上は宇土半島の国越古墳に引き継がれるが、その後、この地域にこれらの古墳の影響を受けた装飾古墳が出現する契機になったものと考えられる。

その後出現した装飾古墳の1基が、下益城郡城南町の甚九郎山古墳〔三島 1984〕である。この古墳は、全長約37mの前方後円墳で、横穴式石室を主体部とするが、破壊が激しい。調査時には玄室左側壁の凝灰岩製切石1枚だけがかりうじて現位置を保っており、検出された床面からみて、玄室の平面形は幅約2mで、奥行約3.4mであったという。残っていた左側壁は、長さ173cm、高さ50cmで、この石材に装飾があった。

石材の上から3cmと11cmのところには横走る細線が引かれ、その帯状の区画内が赤く塗られ、やや左寄りに図柄不明の赤色文様があり、帯状区画の下にはほぼ等間隔に白・青の3個の装飾文があり、その左端は径5cm余の白色の円文であったが、他の2個は青色の形状不明であったという。この他、右側壁の一部とみられる石材破片にも彩色が認められたという。

この甚九郎山古墳の詳細なことは不明であるが、石障が石室壁面へと変化した段階の古墳と考えられ、奥に長い平面形態や装飾文様などから、6世紀前半の古墳と考えられる。

甚九郎山古墳よりも新しく位置づけられるのが、上益城郡御船町の今城大塚古墳〔梅原 1919e, 緒方 1984〕である。今城大塚古墳は、幅約15m、長さ約30mの不正形をしているので墳形が不明であるが、前方後円墳とみる研究者もいる。主体部は凝灰岩切石で築かれた単室の横穴式石室である。玄室は、奥壁1枚、右壁1枚、左壁2枚の巨大な腰石を据え、奥に石棚を架している。腰石の上には斜めに面取りした切石を持送式に積み上げ、大きな天井石を乗せている。羨道は玄室よりやや幅が狭く、左右とも3石で造られ、玄室との境には袖石が立っている。

装飾文様は奥壁にある。もとは赤・緑・黄の3色で描かれていたというが、今は赤色のみが残っている。図柄は同心円文を数個配置し、その間や周辺に盾のようなものや田の字のようなものも描いているが、不明のものもある。

今城大塚古墳の時期は、巨大な切石造りであること、玄室奥に石棚があること、玄室上部の切石積が大野窟古墳と共通すること、装飾文様が彩色のみでラフに描いてあることなどから6世紀後半と考えられる。この地域で最後の装飾古墳である。

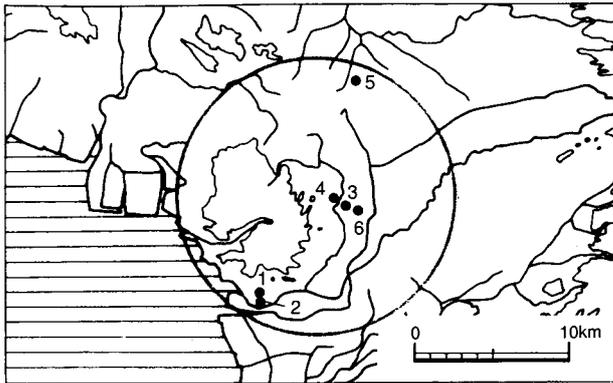


図15 熊本平野北部の装飾古墳位置図

1 千金甲1号 2 千金甲3号 3 富ノ尾1号  
4 釜尾 5 横山 6 稲荷山

## ⑦……………熊本平野北部の装飾古墳

熊本平野北部の装飾古墳は、直弧文系装飾古墳である千金甲1号墳が5世紀後半に造られたのを契機として開花する。そして、羨道が細長く、石室平面形帯が三味線形を成し、同心円文を主文様とする独特の地域を形成する(図15)。

千金甲1号墳については、先に述べたが、石障系横穴式

石室で、肥後におけるコ字形屍床配置の古墳で最も古のものである。装飾は、石障や仕切石に、同心円文、対角線文(X形文)、靱などを彫刻し、赤・青・黄で美しく彩色されている。

千金甲1号墳の影響を受けて造られた古墳の1基が富ノ尾1号墳〔伊藤奎二 1984 b〕である。熊本市にある直径約15mの円墳で、主体部は安山岩板石で造られた石障系横穴式石室である。奥石障と左右石障は、大石1枚に別の石材を継ぎ足して構築し、前石障は3枚からなり、入口部の1枚は低く框石になっている。もとは石障の内部をコ字形に仕切っていたが、奥の仕切石などは抜き去られている。石障のまわりは、薄い板状割石を持ち送りで積み上げ、天井石を乗せている。羨道の前には細長い羨道があり、羨道両側は下部に安山岩を立て、上部は板状石を平積みしている。

石室内の平積みした壁面や石障の一部には赤く塗られていた痕跡がある。かつては、羨道部西側の腰壁石に赤色で円文と三角文が描かれていたというが、現在は消滅してしまっている。

富ノ尾1号墳は、千金甲1号墳の影響を受けて在地の安山岩割石で築かれた単室の石障系横穴式石室として捉えることができ、前石障が3枚の石材で構築されるなどやや新しい要素も加わっているので、5世紀末頃に造られた古墳と考えられる。

なお、富ノ尾古墳群にあったとみられる奴舂形の女性石人があり、現在東京国立博物館に保存されている。

富ノ尾1号墳と白川支流井芹川を挟んで対峙したところに釜尾古墳〔浜田 1919 b, 乙益 1984 j〕がある。釜尾古墳は、直径20m余りある円墳で、主体部は安山岩で築かれた複室の横穴式石室である。玄室は石材が移動して不明なところもあるが、奥と左には石障状の板石が立っており、恐らく右にもあったものと考えられる。ただし、前石障に当たるものは造られていない。玄室の奥には、石障の裏に立てた板石と両袖石の上に大板石を架した石屋形があるが、現在屋根材は移動している。玄室左側には仕切石が一枚残っており、もとはコ字形に屍床を配置していたことが分る。周壁は薄い板状割石を積み上げている。天井石は失われている。前室は未発達で、羨道幅と同じで細長い。羨道との境に袖石があり、框石を置いている。また前室の両側だけは凝灰岩切石が用いられ、それを腰石として安山岩割石を積み上げており、天井も羨道より少し高く造られている。羨道は安山岩の腰石の上に割石を積み上げている。玄室の周壁は、床から約1.5mまでを赤く塗り、その上部は白く塗り分けられている。

装飾文様は、石屋形と玄室入口を中心に、赤・青・白の配色で美しく描かれている。石屋形奥壁には、横向きの双脚輪状文3個と同心円文1個が並び、間に大小の三角文が描かれている。その後

方に立てられた屋根の支え石にも三角の刺のついた同心円文や三角文が描かれている。また左壁にも同様な文様が描かれている。石屋形の右袖石前面には、上方に同心円文、下方に横向きの双脚輪状文、その周囲を三角文で埋め尽している。左袖石は、2枚の板石から成り、外側の石には三角文のみを施すが、内側の石には上方に逆の双脚輪状文、下方に同心円文、その他のところを三角文で埋めている。石屋形の屋根は、広い安山岩の板石で、遊離しているため上下が不明であるが、文様のある面が内側だと考えられる。とすれば、石屋形の天井面を4つに区画し、各々を大きな連続三角文で埋めているとみることができる。また石屋形の軒先部に当たるところには小さな多重連続三角文を施している。玄門入口部は、袖石と眉石の玄室側の面に大きな三角文を描き、眉石下面には二列に多重連続三角文を描いている。その他、玄室左の仕切石に三角文、左周壁に同心円文?などがあり、遊離石材にも装飾がある。

釜尾古墳の石室は、富ノ尾1号墳の石障系石室の流れをくむものの、前石障が省略され、奥屍床は石屋形へと発展を遂げている。また装飾文様は、千金甲1号墳でみられた同心円文は引き継ぐが、対角線文は分割されて三角文へと変化し、新たな双脚輪状文が加わっている。このような発展状態から見て、釜尾古墳の年代を6世紀前半でも古い段階に位置づけたい。

肥後の装飾古墳で、釜尾古墳にあったような双脚輪状文を描いた古墳がもう1基知られている。それは鹿本郡植木町の横山古墳〔上野 1984〕である。この古墳は、全長38.5mの前方後円墳であったが、現在破壊され、鹿本郡鹿央町の岩原古墳群の一角に石室と共に移転復元されている。玄室の石材は、近くに産する石灰岩のやや大きめの割石を主とし、一部に安山岩を交えている。玄室周壁は、それらの石材をゆるやかに持ち送りで積み上げ、一枚の巨石を天井石としていたが、天井石は落下していた。玄室の奥に安山岩を組んで下部を造り、凝灰岩切石の屋根を乗せた石屋形があり、その前方両側にも安山岩板石で仕切った屍床を設けている。羨道部には、框石状のものがいくつかあるが、袖石がなく、天井の高さも同一であるので、前室とは認め難く、羨道の長い単室墳と考えたい。

装飾文様は、石屋形を中心として描かれており、浅い線刻の文様を赤・青・白の三色で塗り分けている。石屋形奥壁は、剝落が激しいが、床面すれすれに赤の三角文が残っている。石屋形の右袖石には、上方に同心円文、下方に逆の双脚輪状文が描かれ、まわりに三角文を配置している。左袖石には、上方に逆の双脚輪状文を描き、その他は三角文で埋め尽している。また石屋形軒先にも細線の連続三角文が横に並んでおり、もとは塗り分けられていたと思われるが、剝落のため、赤色しか識別できない。その他、左右の屍床の仕切石や囲み石にも連続三角文等が描かれており、玄室天井石にも三角文がある。

釜尾古墳と横山古墳を比較すると、釜尾古墳の石屋形は奥と左右壁は石障を利用して造られているが、横山古墳は完全に石屋形の壁として造られている。また、石屋形の袖石の文様等で両者を比較すると、ほぼ同じ位置に同じような文様を描きつつも、横山古墳の方は、左袖石の下方の同心円文が無く、右袖石下方の双脚輪状文の刺が無くなっているなど簡略化が認められる。このようなことから横山古墳の時期を、6世紀前半でも釜尾古墳より一段階新しく位置づけたい。

先に述べた千金甲1号墳から山腹を300m程下ったところに千金甲3号墳〔梅原 1917d, 伊藤奎二 1984c〕がある。直径約15mの円墳で、主体部は安山岩割石で築かれた単室の横穴式石室であ

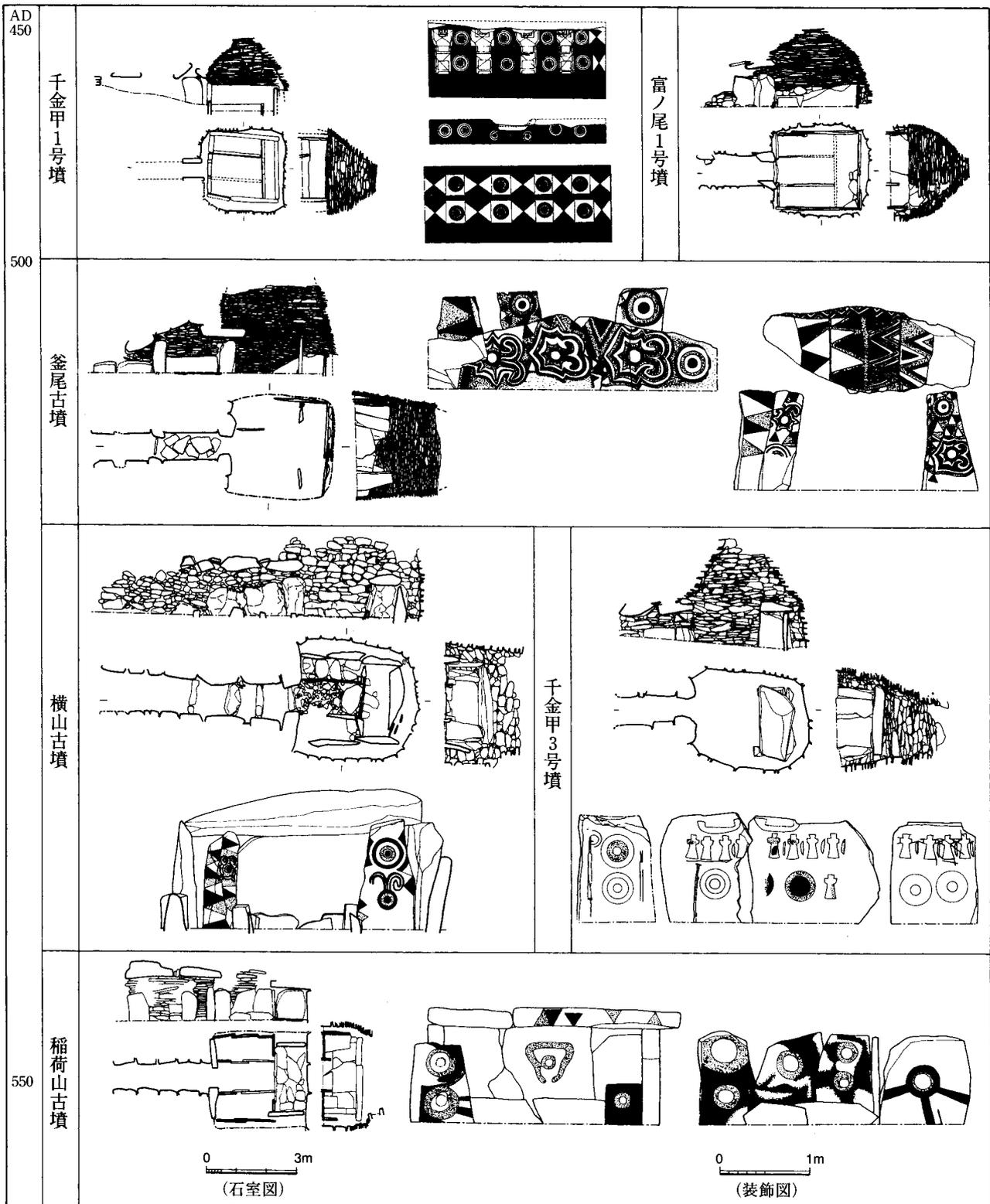


図16 熊本平野北部の装飾古墳編年図

る。壁面は、厚手の石と薄手の石を交互に積み上げて構築している。玄室の奥に石屋形がある。奥壁を2枚、左右壁を各1枚で造り、1枚石の屋根を乗せている。石屋形以外に埋葬施設がないが、本来は横山古墳のように両側にも屍床が設けられていたものと考えられる。羨道は細長い。

装飾文様は、石屋形にみられる。各文様とも細線で描かれ、もとは赤と緑で彩色されていたが、今はすっかり退色してしまっている。石屋形奥壁には、上段にゴンドラ形舟が2隻、中段に鞞8と弓5、下段に鞞1、三重円文3、大刀1が描かれている。また石屋形の右側石には、上段に鞞と弓が各4、下段に二重円文2があり、左側石には、中央の上下にそれぞれ三重円文、その左右に大刀1ずつを配置し、その正面小口にも大刀2を描いている。さらに石屋形の屋根の正面中央にも三重円文1が描かれている。

千金甲3号墳は、文様から見ると、千金甲1号墳の同心円文、鞞、ゴンドラ形の舟などを引き継いでおり、それに新たに弓、大刀などが加わった形であるが、彫刻から線刻へと技法は大きく変わっている。また石室構造においても大きな違いがみられる。このようなことから千金甲3号墳は年代的に、石室構造が類似する横山古墳と同じ頃の6世紀前半に造られたと考えられる。

熊本市にある稲荷山古墳〔乙益 1964, 隈 1984 f〕は、直径約30mの円墳で、主体部は、安山岩の自然石と割石で構築された細長い羨道を持つ横穴式石室である。玄室の奥に厚手の板石で築かれた石屋形がある。石屋形の奥壁は玄室の奥壁を利用し、左右側石は各1枚、屋根は2枚で構築している。石屋形の前面は、やや低い袖石を立て、その間にも2枚の仕切石を立てている。玄室の左右にも低い仕切石で区切られた屍床があり、その壁側には縦長に板石が立てられている。

装飾文様は、赤・青・白の彩色で描かれている。奥壁には、いびつな逆三角形の中に同心円文、石屋形の左側石には同心円文とそれから放射状に延びる3本の帯状の線が描かれている。石屋形の左袖石には上方に同心円文、下方に2本の帯状の線の付いた同心円文があり、右袖石には小同心円文1が描かれている。また石屋形屋根の正面には連続三角文がみられる。その他、左右屍床の外側に立てた板石にも同心円文が多数描かれている。これらの同心円文等は線刻の下絵がないため、かなり自由に描かれている。

稲荷山古墳は、板石が多く用いられているため一見古い印象を受けるが、よく見ると、石屋形の奥壁は玄室の奥壁と一体化し、石屋形屋根石を玄室奥壁に乗せかけており、石屋形の構造では横山古墳や千金甲3号墳より新しいと考えられる。それでは板状石材を多用しているのは石材産地から遠距離なためではなかろうか。装飾文様を見ると、石屋形軒先の連続三角文は釜尾古墳のものに比べると単純化しており、石屋形にある放射状の帯の付いた同心円文は、釜尾古墳や横山古墳に施されていた双脚輪状文の変形形態として捉えることもできる。以上のような観点から稲荷山古墳の年代を6世紀半頃と考える。

## ⑧……………菊池川下流域の装飾古墳

先に述べたように菊池川流域においては、4世紀代に線刻画のある箱式石棺、5世紀代に彫刻のある舟形石棺や家形石棺が存在したが、それらは後の装飾古墳に発展することはなかった。菊池川流域に本格的な装飾古墳が出現するのは6世紀代に入ってからである。その最古のものは、菊池川

下流域においては塚坊主古墳、菊池川中流域においてはチブサン古墳である（図17）。

玉名郡菊水町の塚坊主古墳〔隈 1984 g, 熊本県 1994〕は、清原古墳群のうちの1基で、全長44mの前方後円墳である。主体部は、小さな安山岩割石を積み上げて築いた横穴式石室で、小型の前室も付設されている。玄室の奥には凝灰岩で造られた石屋形がある。石屋形は、奥壁と左右壁を各1枚の板石で造り、右袖石1枚、左袖石2枚を立て、その上に両端に縄掛突起の付いた家形の屋根を乗せている。石屋形の前面には、L字形に仕切石を立て、石屋形と平行に1区の屍床を設けている。

装飾文様は、石屋形の内壁の奥壁と左右壁にあり、赤と白の彩色で描かれている。各壁の文様とも赤の線で割付した中を彩色しており、中央に円文を並べてそれを横線で結び、その上下をややいびつな斜格子文で埋めている。

塚坊主古墳の石室は、横穴式石室の奥に、同台地上の江田船山古墳の家形石棺の形を平入りにして持ち込むことで成立しているが、より初源的な形の玉名郡岱明町の弁財天古墳の影響も考えられる。装飾文様は、斜格子文と円文で、斜格子文はX形文を連続して施すことで生じる文様で、熊本平野北部の千金甲1号墳に祖型を求めることができ、円文も同心円文から変化したものとみられる。江田船山古墳との関係から、塚坊主古墳の時期を6世紀の初めに位置づけたい。

塚坊主古墳の後に造られたのは、玉名市の大坊古墳〔梅原 1917 e, 田添 1984 b〕である。大坊古墳は、全長約54mの前方後円墳で、この古墳を最後としてこの地域では前方後円墳は造られなくなる。主体部は、塚坊主古墳よりもやや厚手の安山岩割石を積み上げて築いた複室の横穴式石室で、前室は玄室の4分の1程の面積しかない。玄室の奥壁に接して、凝灰岩の板状切石を組み合わせて造られた石屋形がある。玄室の左右にも屍床が設けられていた痕跡がある。

装飾文様は、黒の岩肌の上に赤と青の彩色で描かれ、第1・第2両羨門の閉塞石、第2羨門の両袖石、玄室石屋形の内壁及びその前面を、いずれも三角文で埋め尽している。石屋形奥壁の装飾は特に壮大で、横線で5段に区切り、格段に三角形を5～8個ずつ上下互いに向かい合わせに配列し、さらに2段目と4段目には同大の円文3個ずつを等間隔に三角形の中に配列し、赤色あるいは青色

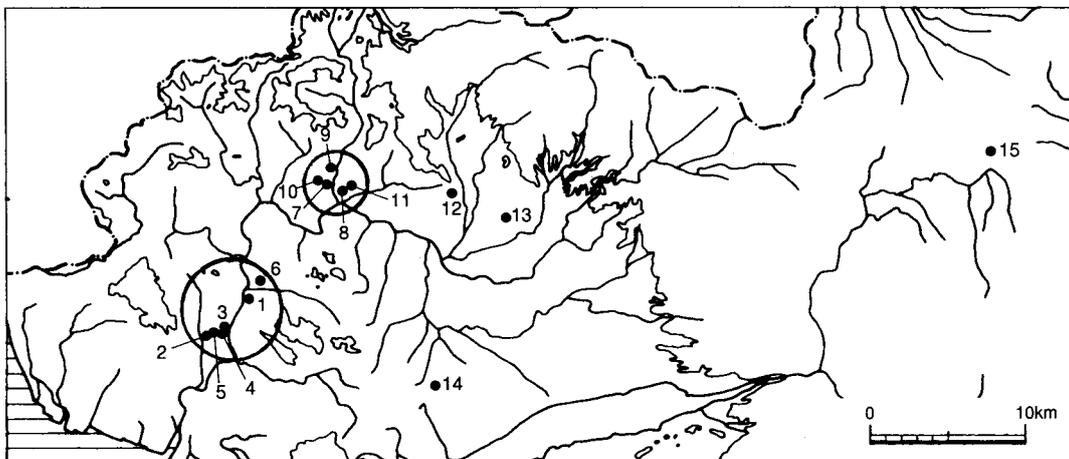


図17 菊池川流域の装飾古墳位置図

- 1 塚坊主 2 大坊 3 馬出 4 永安寺東 5 永安寺西 6 江田穴観音  
7 チブサン 8 臼塚 9 馬塚 10 オブサン 11 弁慶ガ穴 12 御霊塚  
13 袈裟尾高塚 14 石川山4号 15 上御倉

で、塗ったりあるいは塗り残したりしている。

大坊古墳を塚坊主古墳と比較すると、石室の石材が少し大きくなっており、石屋形の屋根の形態は家形から板石に変化している。装飾文様も斜格子文から斜格子文に横線を加えて三角形に分割した図柄に変わり、その中に円文を配置している。このようなことから大坊古墳を塚坊主古墳の直後、6世紀前半に位置づける。

大坊古墳に次いで造られたのが、玉名市の馬出古墳〔田添 1984c〕である。馬出古墳は、直径約20mの円墳であったが、土取工事により消滅した。調査時には石室の前方はすでに破壊されていたが、複室であったと考えられる。玄室は安山岩の低い腰石の上に厚手の安山岩割石を積み上げている。玄室の奥に接して、凝灰岩板状切石で造られた石屋形がある。玄室両側にも仕切石で区画された屍床が設けられている。

装飾文様は、石屋形の奥壁と石屋形側石前面及び両袖石前面にある。いずれも線刻のみ残るが、もとは彩色されていたと考えられる。奥壁は、線刻の消えた所もあるが、復元すると、横線で5段に区切り、1段目・3段目・5段目に三角文を並べ、その間の2段目と4段目に円文を並べている。石屋形側石前面には、縦に連続三角文が描かれていたらしく、その内側の袖石には、小円文2個ずつが3段に並べられ、左袖石には、その小円文に重ねて大円文が3段に描かれている。

馬出古墳は、石室の基底部に腰石を使用しており、大坊古墳よりやや新しく位置づけることができる。文様も円文がより強調され、三角文から独立する傾向がみられる。この古墳を6世紀前半の新しい時期と考えたい。

玉名市の永安寺東古墳〔梅原 1917e, 田辺 1984a〕は、直径13m前後と考えられる円墳で、一部に花崗岩も使われているが、殆んど凝灰岩切石を用いて築かれた複室の横穴式石室である。羨道から前室の前方にかけては壊れており、石材の巨石が半埋没している。玄室は、奥壁、左右壁とも大きな板石1枚を立て、その上に切石を2～3段積み上げて、巨大な天井石で押えている。前室は、天井がやや低いものの、幅は玄室とほぼ同じで、やはり板石を腰石とし、その上にやや小さめの切石を3～4段積み上げている。玄室の奥には、板状切石で築いた巨大な石屋形があり、玄室の半分を占めている。石屋形は、奥壁を省略して玄室の奥壁を利用しており、前面にはU字状の開口部を設けている。石屋形の屋根は板石である。玄室の左右にも小型の屍床が設けられていた痕跡がある。

装飾文様は、玄室では石屋形屋根石の前面にあり、三角文を線刻で並べて描き、逆三角の部分も赤で彩色している。前室では、第二羨門袖石前面に、それぞれ中央縦線を入れ、その両側に連続三角文を描き、赤で彩色しており、三角文を半分ずらして描いているので、稲妻のような文様に仕上がっている。前室右壁には、腰石に12個の円文を2段に線刻で並べ、赤く彩色しており、その上方の切石には赤の彩色だけで小円文、三角文、ゴンドラ形の舟などが描かれている。前室左壁には、腰石に18個の円文を3段に線刻で並べて赤く彩色し、その上の切石に小円文や馬を赤の彩色で描いている。

石室構築石材の巨石化、石屋形奥壁の石室との一体化などから、馬出古墳から永安寺東古墳へと変遷したことが窺われる。文様は、三角文と円文が完全に別の場所に描かれている。この古墳を6世紀半に位置づけたい。

永安寺東古墳の西方約40mのところの永安寺西古墳〔梅原 1917e, 田辺 1984b〕がある。永安

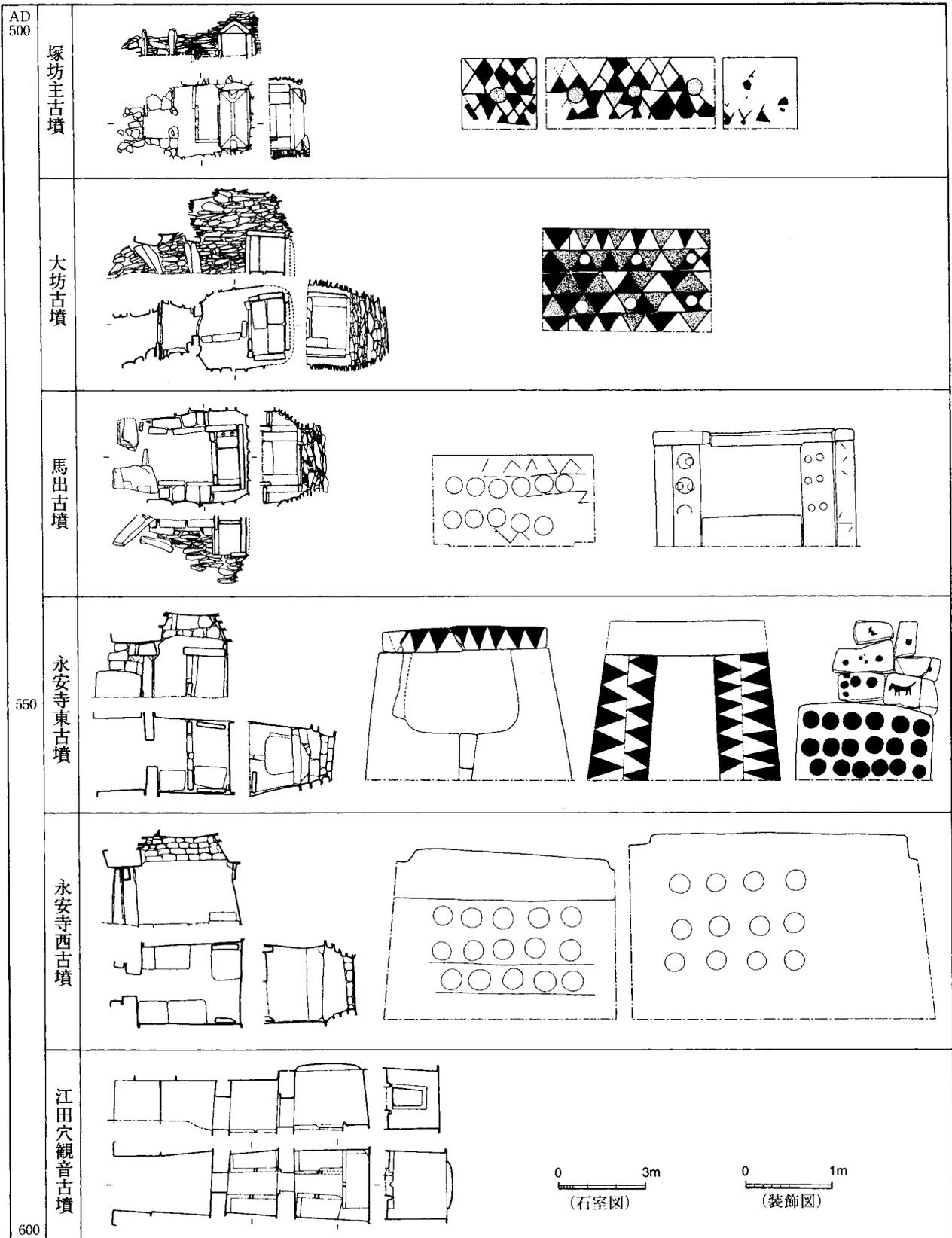


図18 菊池川下流域の装飾古墳編年図

寺西古墳は、直径約13mの円墳で、主体部は凝灰岩切石で築かれた単室の横穴式石室である。奥壁、左右壁とも、永安寺東古墳のものよりさらに大きな一枚石を立てて腰石とし、奥壁はその上に巨石一枚を乗せ、さらに切石を一列並べ、左右壁は腰石の上に切石を石垣状に4段積み上げ、天井石で押えている。石屋形は壊れているが、折れた側石の基部が残っており、また奥壁上部に石屋形の屋根を乗せるための切込があるので、その規模や形状を知ることができる。玄室の両側には屍床の床石だけが残っている。

装飾文様は、奥壁と左右壁にみられる。奥壁は、円文5個ずつを3段に並べて線刻してあり、2段目と3段目の下方には割付のためとみられる横線が引いてある。右壁は、1段目に6個、2段目と3段目に5個ずつ円文が線刻してあり、各段の下に横線が引かれている。左壁は、円文5個ずつを3段に並べて線刻してある。恐らくこれらの円文はもとは赤く彩色されていたものと考えられる。

この古墳は、石室構造から見て、永安寺東古墳の後に造られたと考えられ、6世紀後半の古墳と考えたい。

玉名郡菊水町の江田穴観音古墳〔梅原 1922, 高木 1984 b〕は、直径約17m程の円墳で、複室の横穴式石室を主体部とする。玄室・後室とも、各壁・玄門・天井の全てがそれぞれ凝灰岩切石一枚で造られている。玄門は刳抜玄門である。玄室天井は内面を抉っている。玄室にはコ字形に三区の屍床を、前室には両側に二区の屍床を、それぞれ一枚石で造って配置している。

後年、玄室内で焚火が行われたため、壁面に煤が付着しているが、部分的に装飾文様の一部とみられる赤の彩色が認められるので、装飾古墳と考えられている。

この古墳は、高度な石材加工技術と石室構築技術を駆使して造られている。また石屋形も消滅してしまっている。このようなことから、この地域で最後の装飾古墳と考えられる。年代的には出土遺物から6世紀末に位置づけられる。

## ⑨……………菊池川中流域の装飾古墳

菊池川中流域で最古の装飾古墳は、山鹿市のチブサン古墳〔原口 1984 c〕である。この古墳は、全長44mの前方後円墳で、墳丘上にはもと奴舩形の石人が立っていたが、現在は東京国立博物館に保存されている。主体部は凝灰岩割石を積み上げた複室の横穴式石室で、前室は狭い。玄室の奥に凝灰岩で造られた石屋形がある。この石屋形は、奥壁1枚と両袖石が失われているが、屋根などは家形に精巧に造られている。玄室の左右に屍床の囲み石の一部が残っており、これが石障系石室から発展したものであることを窺うことができる。

装飾文様は、石屋形の内壁に赤と白の彩色で描いてある。左側石は、斜格子文で埋め尽し、その菱形の中の数カ所に同心円文と円文を配置している。奥壁は、失われた1枚を含めると4枚の板石で造られ、X形文を主とする大小の文様を縦に重ねた連続文で埋め尽し、中央付近の中段と上段には円文2個ずつを並べて描き、中段の円文には目玉のように中心点も描き加えている。右側石には、上段に円文7個を描き、下段左に王冠をかぶり両足をふんばり両手を上げた人物、下段右に四角の中に対角線文(X形文)、その間に棒状のものを描いている。また、石屋形屋根の正面軒先には、X形連続文を線刻し、赤で彩色している。

チブサン古墳の装飾文様は、塚坊主古墳と同様、その祖形を熊本平野北部の千金甲1号墳に求めることができる。石屋形の対角線文（X形文）、それを繰り返すことから生じた斜格子文（菱形文）とそこに描いた同心円文などにその影響を見ることができるが、彫刻された千金甲1号墳との差は大きいものがある。

チブサン古墳の年代は、石室構造等から塚坊主古墳と同様に6世紀の初めに位置づけたい。なお、チブサン古墳は、菊池川中流域で現在明らかになっている前方後円墳の中で最後の時期のものである。

チブサン古墳の後に続く装飾古墳が、山鹿市の白塚古墳〔原口 1984 d〕である。白塚古墳は、直径約22m程の円墳で、墳丘には短甲を付け背に鞆を負った武装石人が立っていたが、現在は熊本県立美術館に展示されている。主体部は、複室の横穴式石室であるが、羨道部と前室の一部は、道路工事の際破壊されている。前室・玄室とも凝灰岩割石を積み上げて築いており、前室は狭い。玄室の奥に石屋形があるが、左側石、左袖石、屋根などは失われている。玄室の両側には、壁に接して屍床が設けられている。

装飾文様は、石屋形と玄室入口の両袖石内壁にある。石屋形奥壁は、2枚の石で造られ、左側の石には上段と下段に連続三角文を線刻し、上段の彩色ははっきりしないが、下段の三角文は赤・青・白で塗り分けられている。また中段中央には白色の円文4個が描かれている。奥壁右側の石には三角文を3段に描き、赤・青・白で彩色している。石屋形右側石には、より大きな三角文を3段に描き、赤・白で彩色している。この右側石の前面小口部にも連続三角文の線刻がある。また石屋形右袖石側面には、X形文を連続して線刻している。玄室入口の袖石内壁の装飾文様は、赤地の上に白で描かれ、右袖石には三角文とその下に人物像、左袖石には逆三角文を描いている。

白塚古墳の石屋形の屋根は失われているが、恐らくチブサン古墳の系譜を引く家形であったと考えられる。墳丘に石人を持ち、内壁に人物を描いているなどチブサン古墳と共通するところもあるが、幾何学文が、斜格子文（菱形文）やX形文から三角文に変化していること、三角文と円文が分離する傾向にあること、施文部位が石屋形だけではなく他の部分にも広がっていること、墳形が前方後円墳ではなく円墳になっていることなど白塚古墳が新しいと考えるべきである。6世紀前半の菊池川下流域の馬出古墳に対比できるものとみられる。

白塚古墳の次に造られたのが、山鹿市の馬塚古墳〔原口 1984 e〕である。この古墳は、直径約25～30mの円墳で、主体部は凝灰岩を用いて築かれた複室の横穴式石室である。玄室の左右壁には、表面を削平した厚い長方形の巨石を立て、その上部や奥壁には不規則な板状割石を積み上げている。奥の石屋形は、破壊されているが、破片から家形を成していたことがわかり、その軒先には連続三角文が線刻されていた。玄室左右にも屍床があった痕跡がある。

装飾文様は、石屋形以外に、玄室壁面、前室奥の両袖石にもみられる。玄室左壁は、横線で3段に区切られ、1段目と2段目に線刻で連続三角文を描いている。玄室入口側の壁面にも同様の線刻があるが、この面には3段目にも線刻が残っている。これらはもと赤・青・白で塗り分けられていたと考えられるが、風化して消えてしまっている。前室奥の両袖石前面には、それぞれ中軸線を引き、その線の左右に対称に連続三角文を線刻しており、この部分のみは眉石により風化を免れて、赤・青・白の彩色が残っている。

馬塚古墳は、一部に腰石を据えて構築し、羨門の袖石も大型化しており、白塚古墳よりも新しく位置づけられる。文様においても、菊池川下流域の永安寺東古墳に対比でき、6世紀半頃の古墳と考えられる。

次に造られたのが、山鹿市のオブサン古墳〔原口 1984 f, 桑原ほか 1987〕である。オブサン古墳は、チブサン古墳の北西350mのところにある直径約21mの円墳で、凝灰岩で造られた複室の横穴式石室を主体部とする。玄室・前室・羨道の各壁とも、それぞれ巨大な板石1枚ずつを立てて腰石とし、その上部に大きな割石を積み上げ、天井石を乗せている。石屋形は破壊されているが、玄室奥壁に屋根を乗せる段の切込があるので、奥壁が石室と一体化していたことが分る。また両側壁には切込がないので、石屋形側石は別造りで存在したことが分る。玄室両側にも屍床の痕跡がある。前室は馬塚古墳のものより広さを増しており、両側に屍床を想定できる。

装飾文様は、玄室奥に線刻があるが、これは当初のものかどうか疑わしい。玄室左の仕切石には、赤の連続三角文が、逆三角形で描かれており、本来は石屋形にもこのような文様があったものと想像される。

オブサン古墳は、石室や石屋形の構築法などから、馬塚古墳より一段階新しく、菊池川下流域の永安寺西古墳の時期と考えられ、6世紀後半に位置づけられる。

この他に、オブサン古墳の時期頃造られた古墳として、やや地域が離れるが、鹿本郡鹿本町に御霊塚古墳〔富田 1976, 原口 1984〕がある。この古墳は、直径約12mの円墳で、主体部は単室の横穴式石室である。大きな凝灰岩腰石の上に、大小の凝灰岩を積み上げて、天井石を乗せている。

玄室の各所に赤と白の彩色が残り、多くの装飾が描かれていたと考えられるが、現在、奥壁の左下に靱と鞆の絵が、右壁入口側の石材にX形文や靱の絵が確認できるだけである。他の古墳の系譜から外れているためか、石屋形も造られていないが、石室構築法などからオブサン古墳の時期に位置づけておきたい。

オブサン古墳よりもう一段階新しいと考えられるのが、山鹿市の弁慶ガ穴古墳〔原口 1984 h〕である。弁慶ガ穴古墳は、直径約15mの円墳で、主体部は複室の横穴式石室である。各室とも巨大な凝灰岩切石の上に、凝灰岩の塊石または切石を積み上げて、天井石を乗せている。玄室の奥に、玄室の奥壁と側壁をそのまま使って天井石を架した、巨大な石屋形がある。この石屋形には巨大な袖石が付いており、屋根の形状はかろうじて家形を留めている。玄室・前室とも両側にも屍床があったことが分る。前室が発達し、羨道・前室・玄室がほぼ直線的に同じ幅になっている。

装飾文様は、殆どどの壁面に赤・青・白の三色で描かれているが、玄室は後世に付着した煤のため、わずかに石屋形両袖石の小口に赤の連続三角文が確認できるだけである。前室の絵は割合保存が良く、左右壁の他、羨門の袖石にも描かれており、連続三角文や菱形文や同心円文などの幾何学文様、舟に乗った馬、人物、騎馬人物、靱などが多数描かれている。特に馬と舟が多いのが注目される。その他、羨道の右壁面には彫刻で、1体の人物像が彫られている。

弁慶ガ穴古墳は、石室構造などから、この地域で最も新しい装飾古墳と考えられる。時期的には6世紀末に比定できる。最後の装飾古墳にこの地域の装飾文様を集約するように描いているのは象徴的である。

なお、菊池川中流域の装飾古墳の特徴として、菊池川下流域において石屋形の屋根が板石に変わ

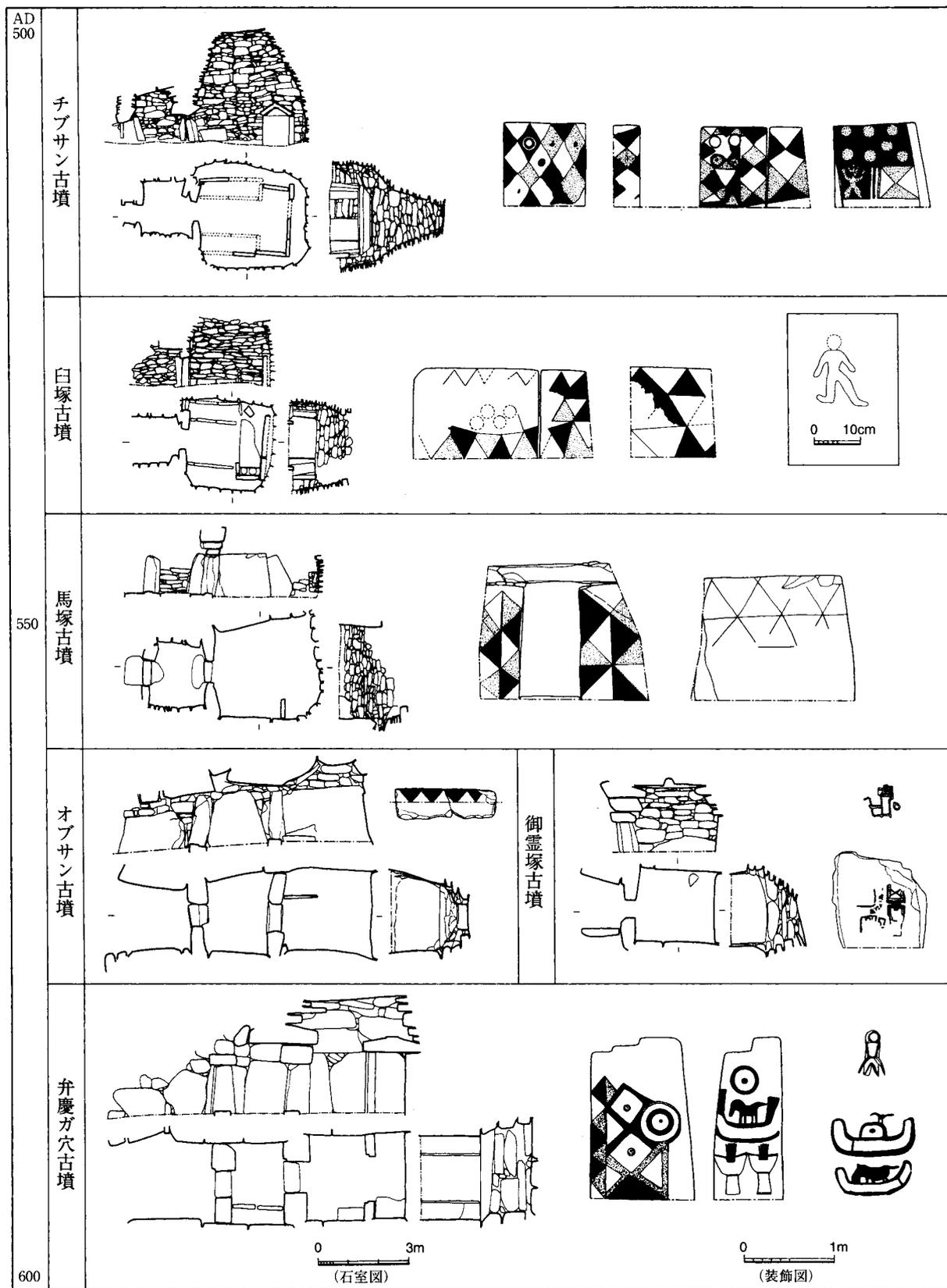


図19 菊池川中流域の装飾古墳編年図

たのに対し、最後まで家形が残ることである。また装飾文様の中に人物の描かれたのが多いのが注目される。

## ⑩……………菊池川上流域と阿蘇谷の装飾古墳

ここでは菊池川中流域の装飾古墳と石室構造や装飾文様で関連があると考えられるが、何故か一基ずつ遠隔地に存在する菊池川上流域と阿蘇谷の装飾古墳3基について紹介し、編年的な位置づけをしたい。

菊池川上流の菊池市に袈裟尾高塚古墳〔隈 1984 h〕がある。この古墳は、直径約15mの円墳で、主体部は複室の横穴式石室である。石室を構築した石材は、9割以上が凝灰岩の自然石と切石で、その他に安山岩や花崗岩等の自然石河原石が使われている。玄室の奥壁に接して石屋形があり、奥壁と天井石は安山岩、両側石は凝灰岩で築かれている。石屋形の前面は、低い袖石と仕切石で区切られている。玄室の左右にも仕切石が立てられて屍床が設けられている。玄室周壁は、下方に凝灰岩や安山岩の巨石を腰石として据え、その上にやや小型の石を積み上げている。前室はやや狭く、腰石はない。

石屋形の奥壁に、線刻による装飾文様がある。中央に靱を横に3個並べ、その下に連続三角文を二段に描いている。石屋形の一部に赤の彩色が残るが、線刻文様の彩色は消えてしまっている。

その他に玄室入口の玄門の眉石に使われた凝灰岩板石には、その上面に靱が浮き彫りされていた。

袈裟尾高塚古墳の時期は、石屋形が玄室から独立して造られていること、玄室周壁下部に腰石が用いられていること、連続三角文がみられることなどから、6世紀前半のやや新しい時期と考えられ、菊池川中流域の古墳の影響を受けて造られた古墳と考えられる。

菊池川を遡って、阿蘇外輪山を越えた阿蘇谷にも一基の装飾古墳と言われているものがある。阿蘇郡一の宮町の上御倉古墳〔原口 1984〕で、直径約33mの円墳である。主体部は、安山岩の巨大な石材と凝灰岩の切石で構築された複室の横穴式石室である。玄室は奥壁・側壁とも巨大な凝灰岩切石1枚を立て、その上に石材を持送式に積み上げ、天井石を乗せている。前室・羨道も同じ様な造りであるが、腰石は玄室ほど大きくはない。玄室の奥に石屋形がある。奥壁は玄室の壁を利用し、両側石を立て、家形の屋根を乗せている。袖石は省略されている。石屋形の前に副床がある。玄室入口側の左右にも屍床が設けられている。

装飾文様は、羨道に倒れていた閉塞石にあったと言われ、白色で高い山のようなものが描かれ、その山のほぼ中央に上下に貫く線が通っており、その山の下方に薄い黄色の下地の上に濃い黄色で人物像が描いてあったという。

上御倉古墳の築造時期は、石屋形の奥壁と袖石は省略されているが、側石が残っており、屋根も独立していること、石室腰石に巨大な板石を使用していることなどから、6世紀後半の中頃、山鹿市のオブサン古墳の時期に相当するものと考えられる。

もう1基の装飾古墳は、菊池川支流合志川流域の植木町にある石川山4号墳で、すぐ近くに熊本平野北部の古墳の系譜に含めた横山古墳があるが、それとは系譜が異なり、菊池川流域の古墳と関連が深い古墳である。石川山4号墳〔原口ほか 1984 j〕は、直径約25mの円墳で、主体部は複室の

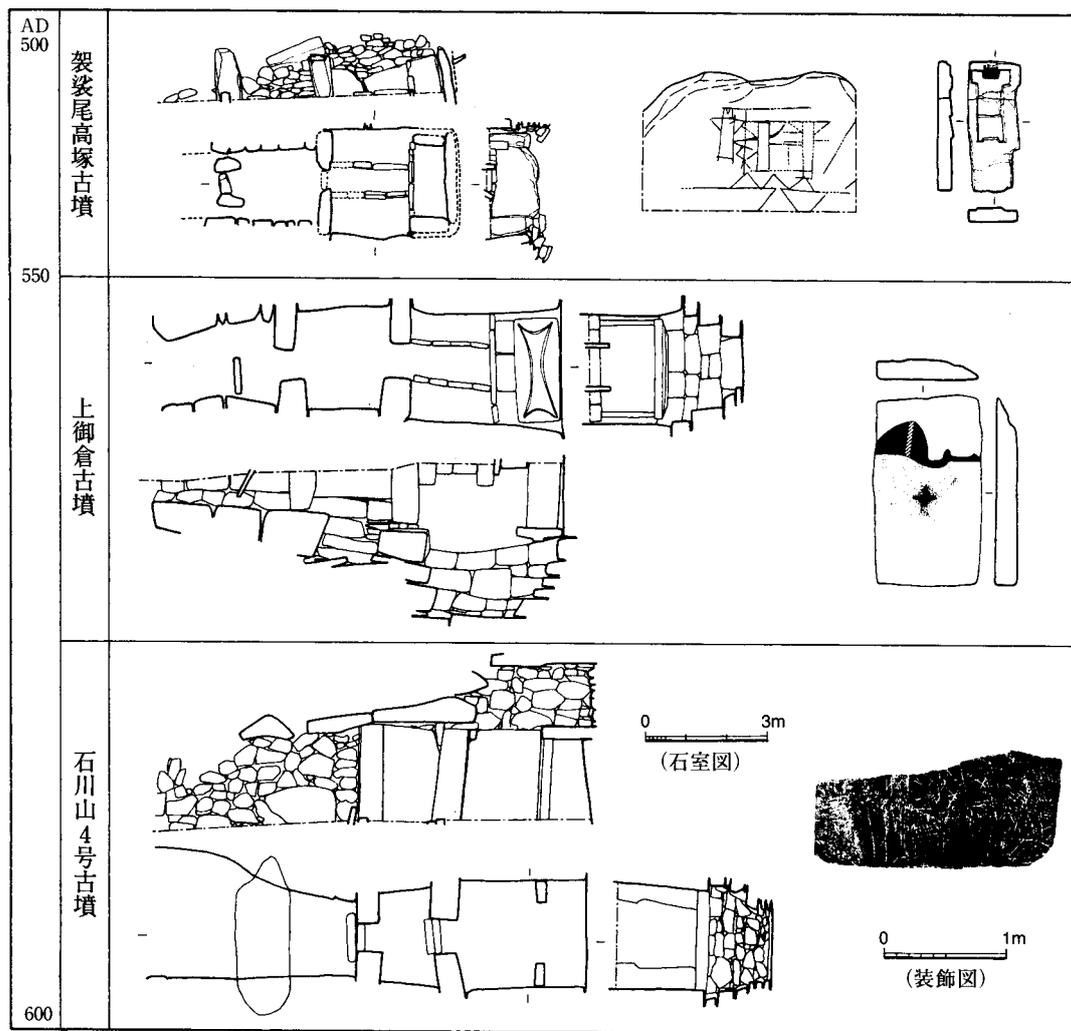


図20 菊池川上流域と阿蘇谷の装飾古墳編年図

横穴式石室である。玄室の奥壁と両側壁には、巨大な凝灰岩板石を立て、その上に割石を持送式に積み上げ、天井石で押えている。玄室の奥には、両袖石を立て、玄室の奥壁と両側壁に板石を架した石屋形がある。前室も両側壁に巨大な凝灰岩板石を立てるが、その上に直接天井石を乗せている。羨道は長く、外に向かって広がっており、壁は下から割石を積み上げ、安山岩の天井石を乗せている。

装飾文様は、この羨道の安山岩天井の下面と側面に線刻で描かれているが、樹木のような文様のほかは、はっきり分らない。林に囲まれた家ではないかと言われている。側面の線刻は、何を表わしたものか分らない。

石川山4号墳の時期は、玄室・後室とも凝灰岩板石で壁を築き、玄室のみその上に割石を積み上げていること、石屋形は奥壁と両側石が省略され玄室の壁が利用され、袖石のみ立てられていること、石屋形屋根が奥壁と両側壁に乗せられていること、前室も埋葬場所としての機能を持たせるのに十分な広さであること、木葉文のような線刻があることなどから、6世紀末頃の古墳と考えられる。石室構造では、山鹿市の弁慶ガ穴古墳の石室と類似しており、同時期の古墳と考えられる。

## ①……………諏訪川下流域の装飾古墳

福岡県との県境付近を流れる諏訪川（関川）の下流域に、3基の装飾古墳がある。熊本県側の荒尾市の三ノ宮古墳と四ツ山古墳及び福岡県側の大牟田市の萩ノ尾古墳である（図21）。

三ノ宮古墳〔三島 1984 j〕は、全長約37mの前方後円墳で、主体部は横穴式石室と推定されるが、破壊され埋没しているため詳細は不明である。ただ装飾のある凝灰岩の板状石材（長さ約1.5m、幅約0.8m）が一枚保存されている。この石材には、2本の平行な横線を引いて段を区切り、その間に連続三角文（山形様波文）が線刻され、赤と青で彩色されていた。

肥後の北部に彩色のある装飾古墳が造り始められるのは、6世紀に入ってからである。菊池川下流域の装飾古墳の文様に当てはめると大坊古墳の装飾文様に似ている。恐らくこの石材は、石屋形に使われていたのではないかと考えられ、三ノ宮古墳の造られた時期は、6世紀前半と考えられる。また大坊古墳と同様に、この地域における最後の前方後円墳ではなかろうか。なおこの古墳からは甲冑を付けた武装石人も発見されている。

四ツ山古墳〔三島 1984 k〕は、直径約10m余りの円墳で、主体部は複室の横穴式石室である。羨道と石室上部は破壊され、腰石だけが残っている。各室とも壁は、古墳周辺にある砂岩の巨石を使用した一枚石で造り、隅の所を小型の補助石で埋めている。玄室はやや奥に長い長方形で、前室は横長の長方形を成し、各々の羨門下部には框石が置かれている。

装飾文様は、もと左右の壁面にコンパスを使って描かれた円文があったというが、今は風化のため消えてしまっている。恐らく当初は赤く塗られた円文が並んでいたものと考えられる。

四ツ山古墳の造られた時期は、砂岩を使っているためやや雑な造りに見えるが巨石を腰石としていること、左右壁面に円文が描かれていることなどから、菊池川下流域の永安寺西古墳に相当する時期と考えられ、6世紀後半の中頃に位置づけたい。

萩ノ尾古墳〔大牟田市教育委員会 1992, 石山 1993〕は、県境を超えた大牟田市にあるが、三ノ宮古墳からわずか400m程しか離れていないので、ここで取り扱いたい。この古墳は、直径約19mの円墳で、主体部は、全て凝灰岩を用いて築いた複室の横穴式石室である。特に玄室の腰石には、巨大な一枚石切石を据えている。奥には腰石に架した石棚があり、床石の幅や装飾文様のある位置からみて、もとは両袖石を伴った石屋形であったと考えられる。各室とも上部は切石を積み上げ、天井石が乗せられている。

装飾文様は、現在は玄室の奥壁のみに残るが、以前は右壁にもあったと言われている。奥壁の装飾文様は、赤の彩色で描かれており、ゴンドラ型の舟、盾、同心円文などがほぼ4段に配置されているが、不明の図柄も混じっている。

萩ノ尾古墳の時期は、巨石切石を腰石としていること、石屋形の屋根を腰石に架していること、割合自由な絵を彩色のみで描いていることなど、菊池川中流域の弁慶ガ穴古

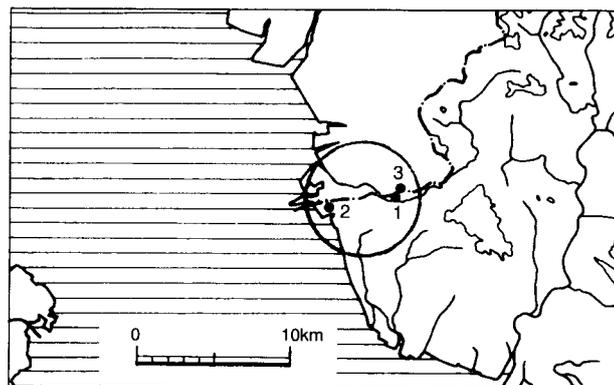


図21 諏訪川下流域の装飾古墳位置図  
1 三ノ宮 2 四ツ山 3 萩ノ尾

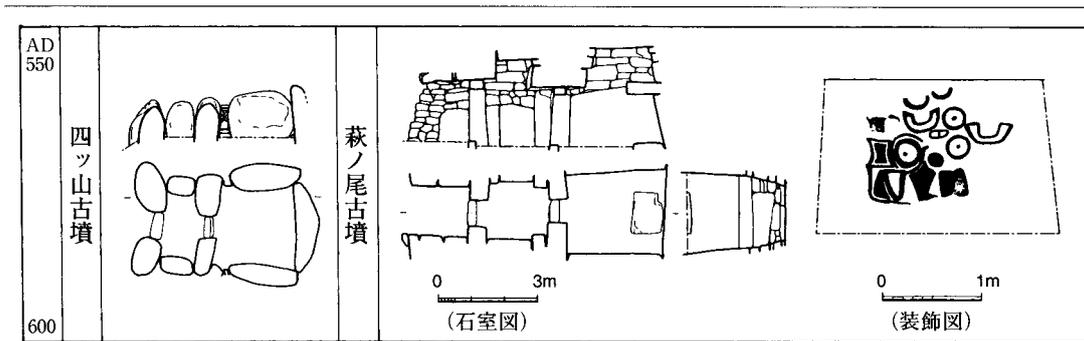


図22 諏訪川下流域の装飾古墳編年図

墳に共通する所が多く、6世紀末と考えられる。

諏訪川下流域の装飾古墳は、以上見て来たように、菊池川流域の装飾古墳と共通する所が多く、この地域との結び付きの中で成立したものと考えてよい。

## ⑫……………菊池川下流域の装飾横穴墓

肥後の装飾古墳のうち、約3分の2の119基は装飾横穴墓が占めており、装飾のある石棺・石室の研究と共に、装飾横穴墓の研究も重要な課題の一つである。その研究の第一歩は、編年学的研究ではなからうか。

肥後における装飾横穴墓は、北部の菊池川流域に集中してみられるが、また遠く離れた南部の球磨川中流域の人吉市周辺にもみられる。ここでは装飾横穴墓が集中的に分布する菊池川流域(図23)を装飾ある横穴式石室の場合と同様に下流域と中流域に分け、さらに球磨川中流域を1つのまとまりとみて、大きく三地域に分けて編年を試みたい。

菊池川下流域には、9群42基の装飾横穴墓が知られている。その最古と考えられるものは、横穴式石室の場合と同様に、X形文やそれを連続させることで作られた斜格子文及び菱形文が施された横穴墓で、それに円文が配置されていると考えられる。

玉名市の石貫ナギノ横穴墓群[高木正文1984c]のうち8号横穴墓は、コ字形に屍床を配置し、奥屍床の前面を家形の浮彫としており、奥屍床の奥壁には線刻で斜格子文の間に二重円文を並べている。この構造は、横穴式石室の奥に石屋形を設けた状態を、横穴墓の中に表現したもので、奥壁の文様もこの地方最古の装飾横穴式石室である塚坊主古墳のものに類似している。この文様の他に、奥屍床前

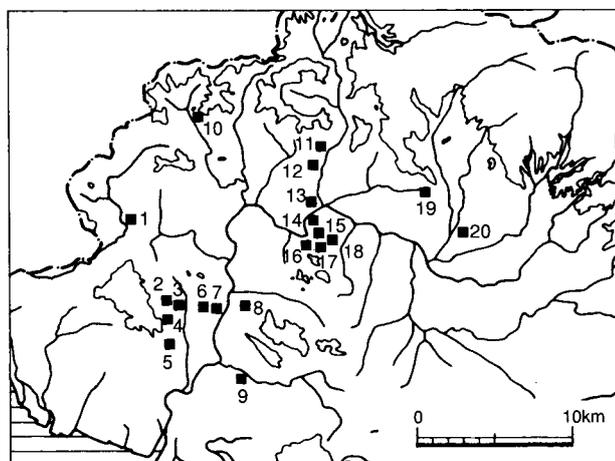


図23 菊池川流域の装飾横穴墓群位置図

- 1 今村岩の下 2 石貫穴観音 3 石貫ナギノ 4 石貫古城
- 5 原 6 横島 7 城迫間 8 長力・北原 9 田崎 10 田中城
- 11 城 12 付城 13 鍋田 14 小原大塚 15 長岩 16 小原浦田
- 17 岩原 18 桜ノ上 19 湯ノ口 20 瀬戸口

面の両袖部には縦に2列ずつの連続三角文，軒下には横に連続三角文，さらに屋根には弓や矢を番えた弓を線刻で描いている。また石屋形状浮彫と左側壁の間には，大刀が浮き彫りにされている。さらに横穴墓の入口には，三重の飾り縁が付き，そこに二重円文や菱形文を線刻で並べ，赤色で美しく彩色している。

この8号横穴墓と墓室形態及び装飾文様の類似したものが数基みられ，これらも相前後して造られたものと考えられる。年代的には塚坊主古墳と同様，6世紀初め頃と考えられる。

石貫ナギノ8号横穴墓に続く形態のものとして，玉名郡南関町の今村岩の下I-1号横穴墓〔高木正文 1984 d〕が考えられる。これは奥屍床前面の石屋形状の浮彫が消滅し，面的になったものであるが，屋根の部分のみは上部を抉り，幅広く突出させている。奥屍床前面の仕切り中央部は破壊を受けているが，両端にはゴンドラ形の舟を表現したとみられる段が残っている。装飾文様は，石屋形状の屋根にみられ，斜格子文の交点を横線で結んで2段の連続三角文帯を線刻している。また通路奥にあたる場所にも同様の文様の一部が残っており，赤色の彩色が認められる。円文こそないが，大坊古墳の横穴式石室の石屋形奥壁の文様に類似しており，6世紀前半の年代に造られたと考えられる。

次に，石屋形の屋根の幅がより狭くなり，石棚を乗せたように表現した形態の横穴墓が登場する。玉名市の原13号横穴墓〔高木正文 1984 e〕などがそれで，石棚状の部分には連続三角文が線刻されている。これは永安寺東古墳の石棚の線刻と共通するものである。また13号横穴墓の奥屍床右袖部には三角文，さらに奥壁には連続三角文と円文を重ねた線刻文がみられる。この横穴墓の年代は，永安寺東古墳と同じく，6世紀半頃に位置づけたい。

なお，千手観音像が彫られていることで有名な

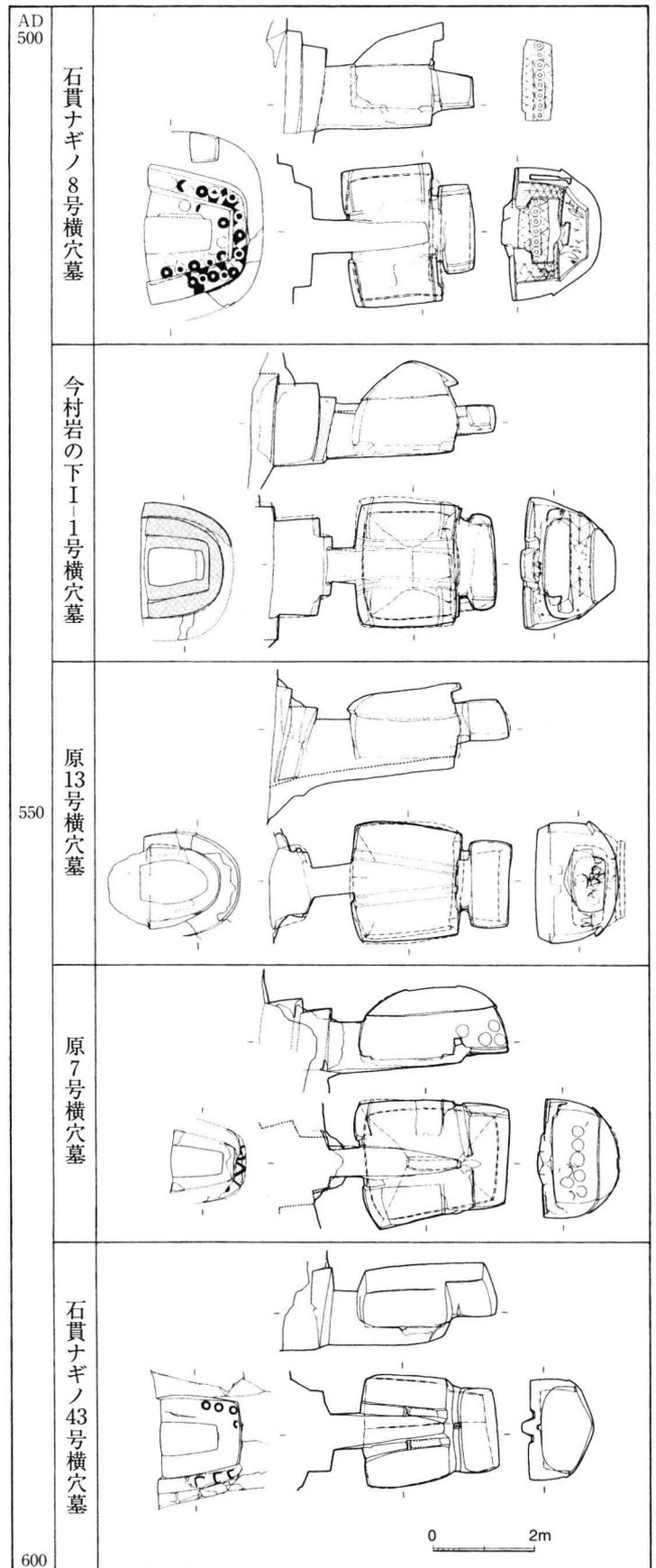


図24 菊池川下流域の装飾横穴墓編年図

石貫穴観音2号横穴墓〔高木正文 1984 f〕も形態からこの時期に位置づけられ、あまり知られていないが、玄室入口側上部の突帯には連続三角文が線刻されている。従って千手観音像は追刻である。

原横穴墓群の中でも7号横穴墓は、13号横穴墓に後続する時期のものと考えられる。それまで石屋形状に独立していた奥屍床が、同一の屋根形天井で覆われ、袖石状のものも消滅する。玄室の平面形態も、前段階の方形から台形化への傾向がより顕著になってくる。7号横穴墓の装飾文様は、玄室の奥壁と左右壁にあり、いずれも線刻の円文を2段に並べている。また入口の飾り縁のころうじて破壊から免れた部分にも、赤の彩色による連続三角文と円点文が施されている。玄室の内壁に円文を並べた状態は、永安寺西古墳に類似しており、この横穴墓を6世紀後半に位置づけたい。

石貫ナギノ横穴墓群の中で新しい傾向を示すのが、43号横穴墓である。平面形態は台形で、玄室全体が丸みを帯びている。天井はそれまで寄せ棟だったのが、切妻状になっており、軒先線の段差もやや弱くなっている。内壁には装飾は認められず、入口外面から飾り縁にかけて、彩色のみで描いた円文とL字形文がみられる。玄室の形態などから、6世紀末に造られた横穴墓と考えられる。

## ⑩……………菊池川中流域の装飾横穴墓

菊池川中流域には、11群62基の装飾横穴墓が知られている。それらも装飾ある横穴式石室の影響で出現したのと考えられる。菊池川中流域で最古の装飾のある横穴式石室はチブサン古墳であり、その主文様はX形文と、それを連続させることから生じた菱形文・斜格子文である。最古の装飾横穴墓も、この文様を施したのから始まる。それは山鹿市の付城57号横穴墓〔高木・隈 1984 g〕である。

付城57号横穴墓は、大型で、コ字形屍床配置の奥屍床は独立して扶られており、石屋形を模倣して、両袖石は凝灰岩切石を持ち込んで築いている。石屋形の屋根石は失われている。玄室の左右の仕切の一部にも凝灰岩割石をはめ込んでいる。装飾文様は石屋形の部分と仕切石にある。石屋形の装飾は、両袖石に三角形の頂点をくっつけてX形文あるいは菱形文に見える線刻文を描き、赤で彩色しており、右袖石側面と奥屍床前面中央部にも連続三角文を線刻し、赤で彩色している。また左右屍床にはめ込んだ仕切石にも、線刻のX形文と赤の彩色がみられる。この横穴墓の時期をチブサン古墳と同様、6世紀の初め頃に位置づけたい。

付城横穴墓群で、石材を持ち込んで石屋形を作った横穴墓がもう1基知られている。72号横穴墓で、石屋形の両袖石と屋根をそれぞれ凝灰岩の割石1枚ずつで築いている。各石には連続三角文を線刻し、屋根の部分は赤く三角形に彩色しているが、左右の袖石は線刻とは無関係にその上に重ねて赤の円文を描いている。石屋形の前には副床があり、石屋形を除いた部分のみでコ字形屍床配置を成している。この横穴墓の時期は、文様が三角文と円文に変化しており、57号横穴墓に後続する時期と考えられ、ほぼ白塚古墳と同じ頃の6世紀前半に当てはめることができる。

なお、山鹿市長岩横穴墓群〔原口ほか 1984 k〕中で、最も知られている108号横穴墓から109号横穴墓の外壁の人物・弓・鞞・盾などの浮彫の時期は、2基の横穴墓の形態が、付城72号横穴墓から石屋形を取り除いた部分の形態に類似しており、この時期のものと考えられる。このことから、白塚古墳の石人と内壁の彩色の人物像、さらに横穴墓外壁の浮彫の人物像の三者が、同時期に併存し

ていることを知ることができる。

付城72号横穴墓の後に造られたものとして、山鹿市鍋田52号横穴墓〔高木正文 1984 h〕が考えられる。奥屍床は独立しているが、屍床の高さや、玄室幅と奥壁幅などの差が少なくなっている。装飾文様は、奥壁と左右壁を斜格子文と横線により描いた大形の連続三角文で埋め尽している。玄室奥の軒先上下には小形の連続三角文を線刻している。また奥屍床袖部前面にはX形文の線刻があり、左袖部下方には鞞の浮彫もある。これらの内壁の装飾文様は、馬塚古墳のものと類似しており、この横穴墓を6世紀半頃に位置づけたい。

なお、鍋田横穴墓群の中で最も有名で外壁に人物・弓・剣・鞞・刀子・盾・馬などを浮彫した27号横穴墓も、玄室の形態や、奥に数段の連続三角文を線刻していることなどからこの時期のものと考えられる。

山鹿市長岩横穴墓群には、諸形態の横穴墓群が見られるが、91号横穴墓は、鍋田52号横穴墓に後続する時期のものと考えられる。奥屍床は両側壁、天井ともわずかな段で区別されている程度で、玄室の軒先は省略され、天井部は丸みを帯びている。装飾文様は、奥壁、奥屍床部分の両側壁、奥仕切の前面、左右仕切の側面にあり、いずれも連続三角文が線刻され、赤く彩色されている。これで連想するのは、オブサン古墳の仕切石にみられた赤の彩色の連続三角文で、近い時期のものと考えられ、この横穴墓を6世紀後半に位置づけたい。

鹿本郡鹿央町の桜ノ上横穴墓群〔高木 1984 i〕のうちI-1号横穴墓は、前述の長岩91号横穴墓と同じ頃造られたと考えられるが、複室構造で、奥屍床仕切の連続三角文の他に、奥壁に二重円文、前室奥に類例のないf字形文3個などが線刻で描かれている。

これに続いて造られたのが隣にあるI-2号横穴墓である。これも複室構造の横穴墓で、玄室は全体に丸みを帯び、側壁・天井部とも奥屍床との

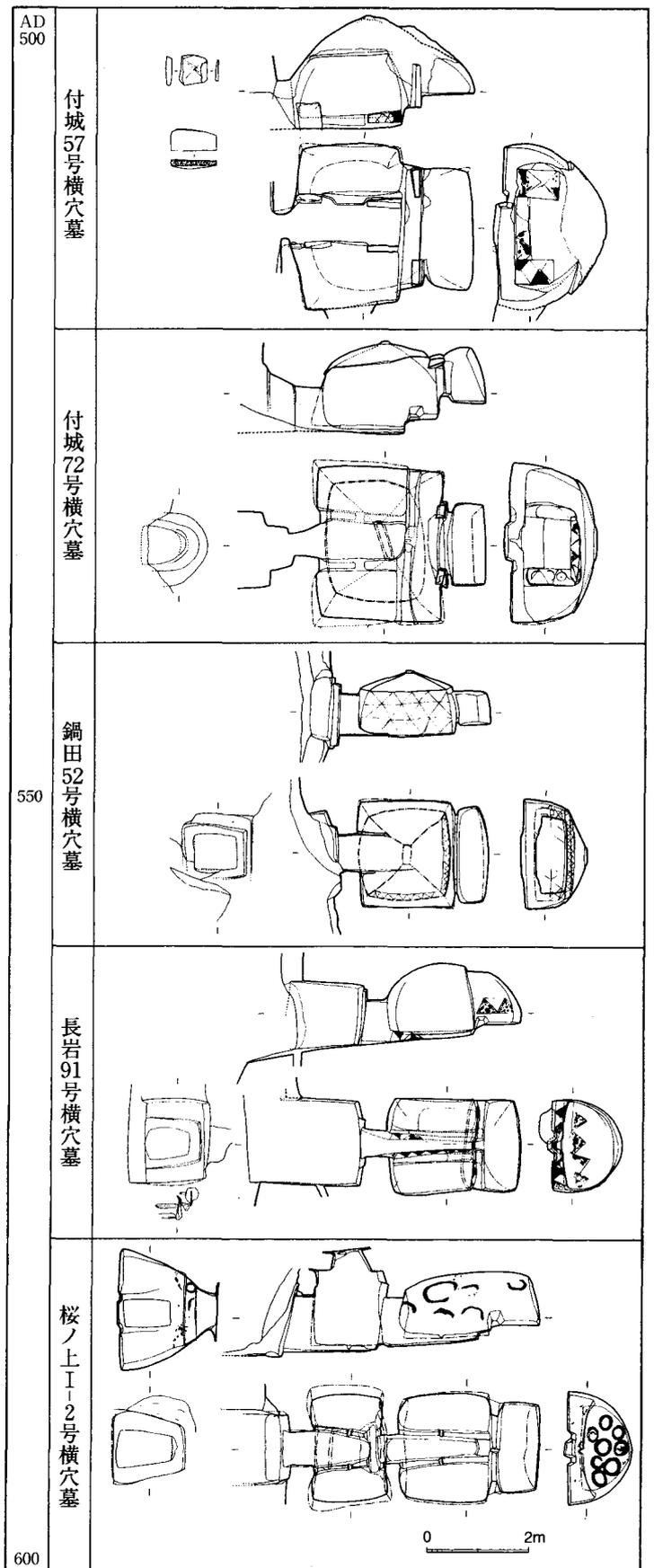


図25 菊池川中流域の装飾横穴墓編年図

境はなく、玄室全体が蒲鉾形をしている。前室天井部の構造は特異で、入口側には1個の自然石を乗せ、それに対応するように奥も凝灰岩壁を積石状に加工し、その上に天井石を乗せている。何らかの理由で、横穴式石室に近い形態に仕上げたもので、興味深い。装飾文様は、玄室の奥壁に多数の円文、右壁に円文とU字状文、左壁に一部切れた楕円文などがいずれも赤の彩色で描かれ、奥仕切の前面にも赤の彩色が残っている。その他前室奥壁上部にも赤の彩色があるが、円文1個だけがかるうじて確認できるだけである。この横穴墓は、玄室構造からみて、やや新しい時期のものと考えられ、文様も彩色のみで描かれているので、弁慶が穴古墳と同じ頃の6世紀末に造られたと考えたい。

## ⑩……………球磨川中流域の装飾横穴墓

球磨川中流域には、現在のところ装飾のある横穴式石室は確認されておらず、装飾横穴墓だけが分布している(図26)。今日までに3群9基が知られており、うち7基は大村横穴墓群の中にある。これらの装飾横穴墓の源流は、球磨川を約45km下ったところにある八代の装飾古墳に求められる。八代は装飾古墳の発祥地で、最初から最後まで円文を主文様として描いた地域である。

八代の装飾古墳の影響が残り、球磨川中流域で最古と考えられる装飾横穴墓は、人吉市の大村15b号横穴墓[高木正文 1984 i]である。この横穴墓は、入口と仕切が激しく破壊を受けており、後世に倉庫として使用されたものらしい。玄室の平面形は方形に近く、コ字形に屍床を配置している。天井はドーム形であるが、壁面との境には軒先を表わす段を設けている。

装飾文様は、奥壁、飾り縁、右外壁の3カ所にある。奥壁の装飾は、中央を残して環状に抉った二重円文で、等間隔に5個並べられている。飾り縁は、両側が三重、上部が二重ついていたと考えられ、残存の文様から各段の正面に二重円文が並べられていたことがわかる。右外壁の装飾は、靱の浮彫と弓の線刻で、筒形の靱の中には形の整った鏃が3本納められている。なお、この横穴墓の内外壁は全面赤く塗られていたと考えられる。この横穴墓の奥壁に並んだ二重円文の装飾は、5世紀末の八代で最も新しい装飾古墳である田川内1号墳の装飾の影響は明らかで、コ字形屍床配置も田川内1号墳のものを引き継いだものと考えられる。この大村15b号横穴墓を6世紀初めに位置づけたい。

大村5号横穴墓も、方形に近い平面形態である。天井は家形を成し、天井と壁面の境には明瞭な軒先の表現がある。屍床は球磨地方に多い片側にのみ仕切を設けるタイプである。装飾文様は、外壁上方にあり、4個の靱が並べて彫られており、1振の剣状のものも彫られている。この横穴墓は、15b号横穴墓に後続する時期の6世紀前半に位置づけることができよう。

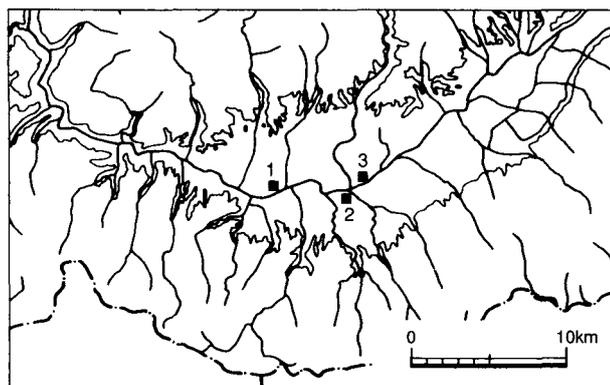


図26 球磨川中流域の装飾横穴墓群位置図

1 大村 2 京ガ峰 3 小原

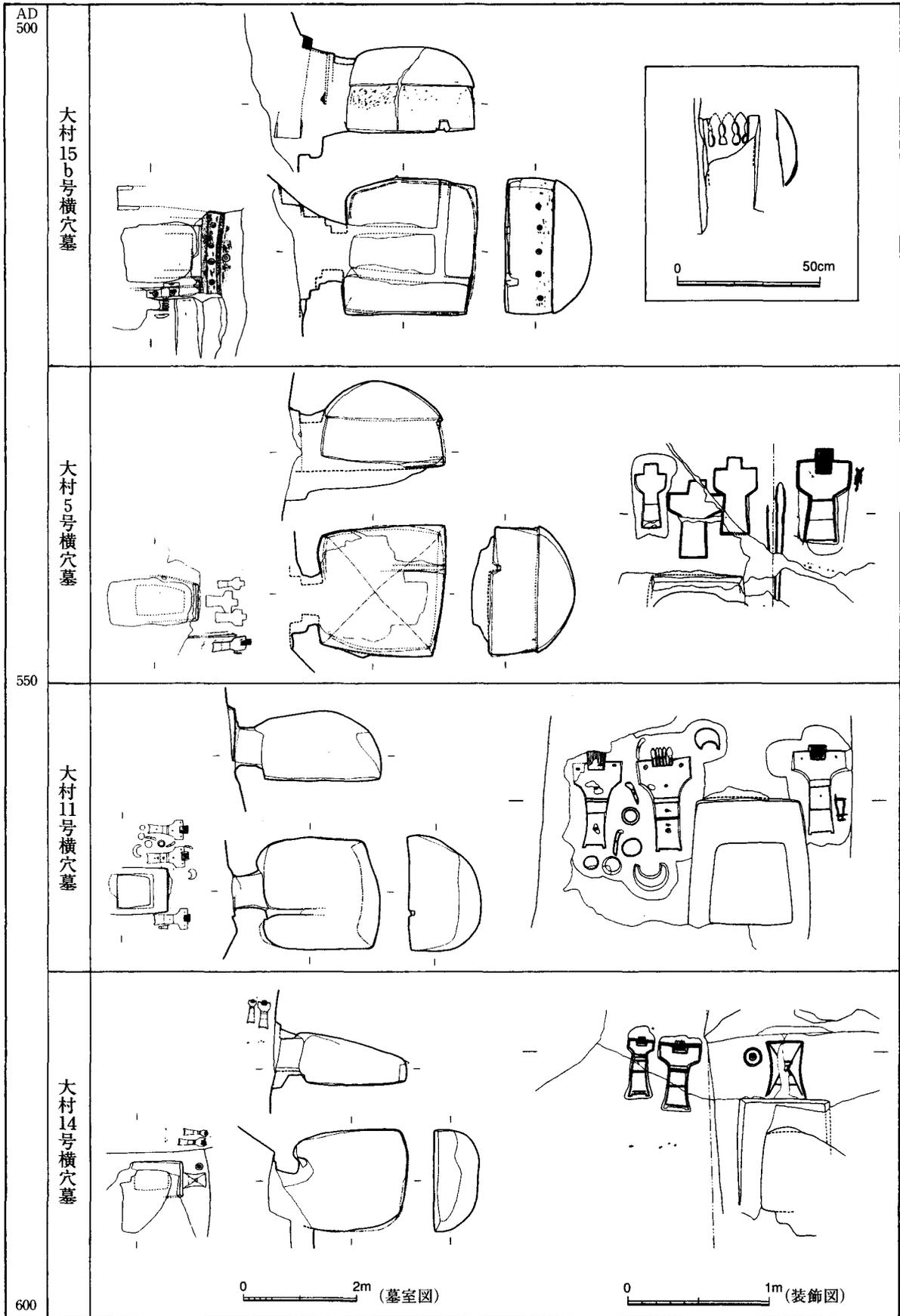


図27 球磨川中流域の装飾横穴墓編年図

この他、仕切は省略しているが、明瞭な軒先を表現し、外壁に盾と剣？と靱を浮き彫りした大村4号横穴墓や、通路と左右の屍床とをわずかな段差で区別し、外壁に盾と円文と大刀を彫刻した大村13号横穴墓も同じ頃に造られたと考えられる。また球磨郡錦町京ガ峰1号横穴墓〔高木正文 1984 k〕は、外壁に2個の靱、車輪状文、盾、剣などを浮彫りしており、玄室にはコ字形配置の屍床の痕跡があり、この時期のものと考えたい。

この後の横穴墓は、玄室の天井部と側壁の境の軒先を表現した段がなくなり、玄室全体もいびつになつたり、丸みを帯びたりしてくる。その中でも片側に仕切りの残る大村11号横穴墓は、やや古く位置づけられよう。外壁には、靱と刀子と柄と円文が浮彫されている。この横穴墓を6世紀後半のやや古い時期に位置づけたい。また、仕切はないが類似した形態で、外壁に連続三角文と大形の三角文、靱、弓、4頭の馬、棒の先に吊された3個の馬鐸状のもの等が彫られた7号横穴墓も、11号横穴墓と同じ頃のものと考えられる。

大村14号横穴墓は、天井が低く、特に奥に向かって斜めに下がっており、平面形など11号横穴墓よりもさらに丸みを帯びている。外壁には、靱と盾と車輪状文を浮き彫りしている。この横穴墓を6世紀末頃のものとする。また、類似の形態で、外壁に円文1個を彫刻した球磨川相良村の小原4号横穴墓〔高木正文 1984 l〕も、同時期の横穴墓と考えられる。

球磨川中流域の装飾横穴墓は、対比できる装飾のある横穴式石室がこの地域にないため、年代の決め手に欠けるが、菊池川流域と同様6世紀代に盛行したものと考えて、年代を当てはめてみた。年代的には多少修正すべきところもあろうが、造られた順序はこの通りであろう。それにしても八代・天草地域で装飾古墳が消滅した後、川を逆上った所にある球磨川中流域の横穴墓に、その装飾の伝統が引き継がれるのは驚くべき事実である。

## ⑮……………まとめ

肥後の装飾古墳で最初に登場するのは円文である。それはすぐ、他の大刀や刀子、短甲などと共に、吊された円文として描かれ、その器物としての姿を顕在化してくる。古墳に副葬される円形の器物のうち一般的なものは鏡である。鏡を古墳に副葬する意味は、被葬者の権力・財力を象徴する目的と、鏡の持つ光を反射する性質からくる魔を防ぐ目的が含まれていると考えられる。恐らく最初に出現する円文は、鏡を彫刻したもので、被葬者を守護するために描いたものではなかろうか。その後加わる大刀・刀子・短甲などの彫刻にも同様な意味が込められているものと考えられる。

肥後の装飾古墳の初期のものは、八代海を挟んで八代・天草地域に分布する円文を主文様として彫刻した石障系石室と箱式石棺の装飾古墳である。中でも最古のものは、石障の中央に箱式石棺を据えた小鼠蔵1号墳で、5世紀初頭に位置づけられる。この地域で最も新しいものは、奥に石屋形を持つ田川内1号墳で、5世紀末に位置づけられる。この八代・天草地域の装飾古墳は、最も古く位置づけられ、他地域へ影響を及ぼしながらも、5世紀代ではほぼ終わりを迎える。

八代・天草地域の装飾古墳を引き継ぐように、球磨川を逆上った人吉市周辺に装飾横穴墓が出現する。6世紀の初めに造られ始め、円文の他、武器・武具を中心とした図文を彫刻するが、馬も彫られている。最後の装飾横穴墓は、6世紀末と考えられ、やはり円文の彫刻で終わりを迎えている。

八代から少し北上したところから熊本平野の南部にかけては、装飾のある家形石棺が分布している。最古のものは、5世紀半あるいは少し下った時期の竜北高塚古墳で、それ以前の方形区画の影り込みのある舟形石棺と、八代・天草地域の箱式石棺の影響を受けて出現し、次第に北上し、6世紀中頃の北原1号墳まで引き継がれる。

宇土半島の装飾古墳は、八代・天草地域の系譜を引く石障系の小田良古墳が5世紀の半頃に最初に登場し、石障の円文彫刻と石室の舟の線刻を併用したヤンボシ塚古墳、石棚と刳玄門のある石室に円文彫刻と舟の線刻のある桂原1号墳などを経て、7世紀初めの舟の線刻のみの仮又古墳に至るまで、舟の線刻を中心とした装飾古墳が展開し、被葬者の海との関わりが強く窺われる。

熊本平野南部の装飾古墳は、不明なものもあるが、石障に同心円文を彫刻した坂本古墳や石障に直弧文を線刻し彩色した井寺古墳など5世紀後半の石障系装飾古墳に始まり、甚九郎山古墳などを経て、巨大な切石で横穴式石室を築き、奥壁に彩色で同心円文や盾状のものなどを描いた6世紀後半の今城大塚古墳で幕を閉じるようである。

熊本平野北部の装飾古墳は、5世紀後半の直弧文系装飾古墳である千金甲1号墳が造られたのを契機として展開をみせる。中でも、双脚輪状文という特異な文様を施した装飾古墳が2基含まれているのが注目される。この文様は、畿内などにおいては埴輪にみられ、器物をかたどったものか、何かを意味する文様であるのか今だに明らかになっていない。2基の古墳は、釜尾古墳と横山古墳で、いずれも6世紀の前半に位置づけられるが、石室形態からみて、幾重にも縁取りを持つ双脚輪状文を描いた釜尾古墳が古く、横山古墳が新しい。双脚輪状文は、福岡県の王塚古墳と弘化谷古墳にも見られるが、省略したり、変形した形になっているので、肥後より後出することは明らかである。石屋形と双脚輪状文の組み合わせで肥後から影響を受けて造られた装飾古墳といえる。6世紀半頃と考える稲荷山古墳の、同心円文に放射線の付いた文様も、双脚輪状文の変形であろうか。なお、熊本平野北部地域の装飾古墳の文様の特徴として、同心円文の多いことが挙げられる。福岡県の彩色装飾古墳の源流は、菊池川流域と共に、この地域に求められるのではなかろうか。特に千金甲3号墳は、同心円文と共に靱や弓などが多数並べられており、王塚古墳などに影響を与えていると考えることができる。

菊池川の装飾古墳は、八代・天草地域で装飾古墳が消滅した後の6世紀代になってからやっと出現する。その最初の古墳は、6世紀初めのチブサン古墳と塚坊主古墳で、横穴式石室の奥に据えた家形をした石屋形の内壁に、千金甲1号墳の文様の影響を受けた文様が描かれている。その文様は、直弧文から変化したX形文、斜格子文、菱形文を主文様とし、その間に円文を配置した文様である。やがてこの文様は、分割横線を入れて三角文へと変化し、施文部位も石屋形内壁のみではなく、玄室壁面に描かれるようになる。石室自体も割石積から次第に巨石で構築したものへと変化し、石屋形も石室奥壁から独立していたものから、奥壁と一体化への道を辿る。一体化の進んだ弁慶が穴古墳や、石屋形の消滅した江田穴観音古墳などは、この地域で最後の装飾古墳で、6世紀末に位置づけられる。また、この地域の装飾文には馬の絵など新たに大陸の思想の影響も窺われる。

なお、菊池川流域の装飾古墳は、福岡県境にある諏訪川流域の装飾古墳にも影響を与えており、さらに福岡県内の装飾古墳にも装飾と共に、石屋形、コ字形屍床配置、複室構造等を伴って、影響を与えていると考えられる。

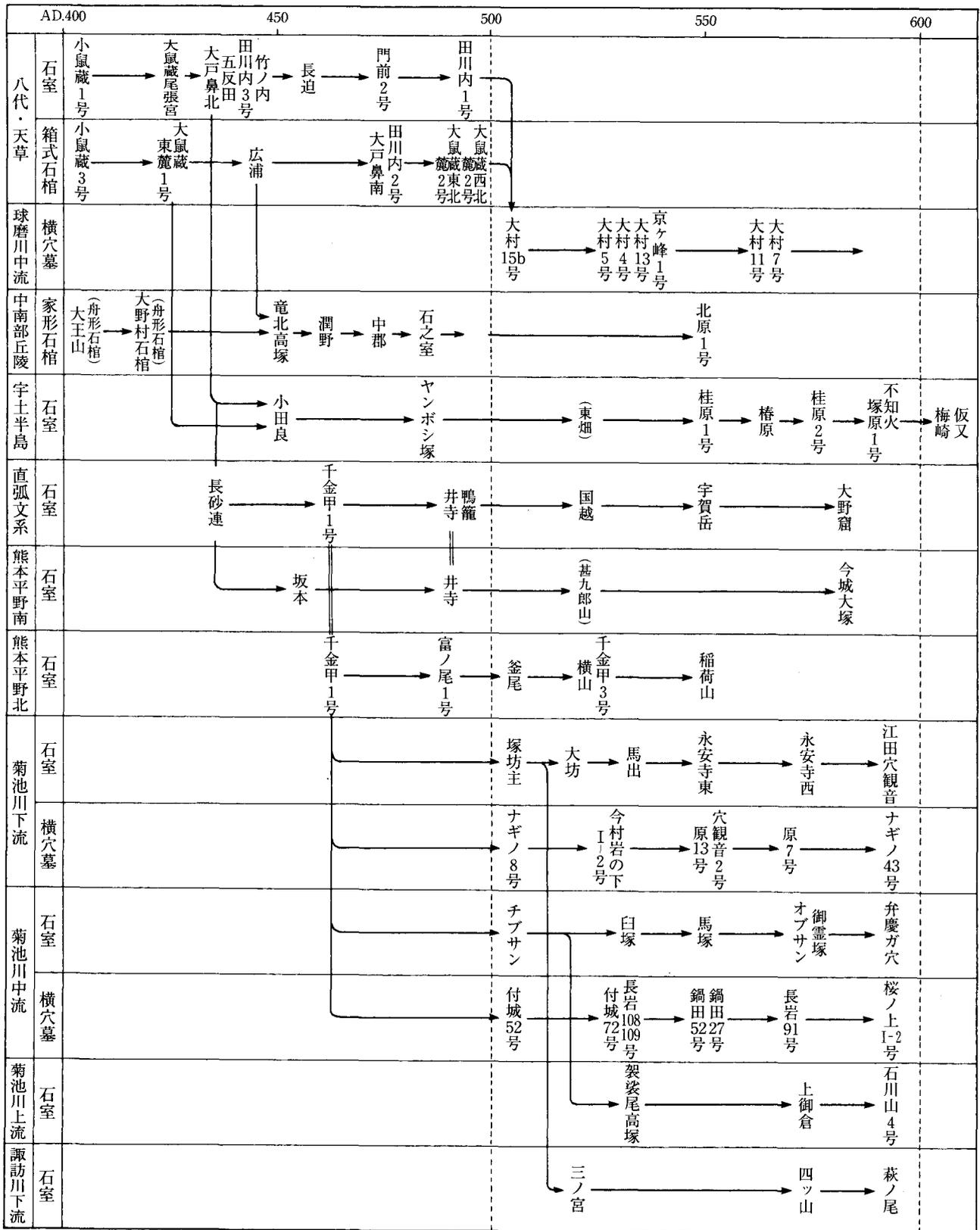


図28 肥後における装飾古墳変遷図

菊池川流域の装飾横穴墓は、装飾のある横穴式石室の出現に遅れることなく、6世紀の初めに出現する。下流域では奥屍床前面を家形の浮彫にして石屋形を表現し、中流域では別の石材を持ち込んで石屋形を造っている。その後の装飾横穴墓の変遷も、装飾横穴式石室の変遷と軌を一にしており、文様にもそれが窺われる。このように見て行くと、新しく位置づけられがちであった中流域の外壁に人物や武具類の浮彫のある横穴墓も、6世紀前半から出現していることは明らかで、下流域の千手観音像が彫られた（追刻）石貫穴観音2号横穴墓も、6世紀半頃に位置づけることができる。そして装飾横穴墓は、6世紀末で終焉を迎えるようである。

以上各地域の装飾古墳の変遷についてまとめたが、最後にこれらの幾つかの地域を覆って分布する直弧文系装飾古墳について述べたい。

全国的に見ると、直弧文を施した4世紀代の石棺として、大阪府安福寺境内の割竹形石棺と、福井県足羽山山頂古墳の舟形石棺が知られているが、5世紀代の古墳に施された直弧文とは異質のもので、系譜的に繋がるものではない。ここでは肥後の直弧文系装飾古墳は、独自に出現したものと考えたい。

肥後で直弧文を施した最古の古墳は、天草島の長砂連古墳で、5世紀前半に造られたと考えられる。その後、直弧文の系譜の装飾古墳は、熊本平野北部の千金甲1号墳、熊本平野南部の井寺古墳、宇土半島基部の鴨籠古墳、国越古墳、宇賀岳古墳など広範囲を移動して造られ、最後には肥後南部の丘陵上の大野窟古墳に至ると考えられる。

直弧文は、鹿角製刀装具や埴輪などにも施された例があるが、その数は決して多くはなく、施された装飾古墳にしても群を抜いて秀れている。このことから直弧文を権力を象徴する文様とみることができないだろうか。とすれば、直弧文を施した古墳こそ、肥後の地域（火の国）の大豪族火の君の墳墓であろう。だからこそ宇土半島を拠点としながらも、広範囲に墳墓の移動が可能であったし、古墳築造の石材を長距離運搬させることも可能であったのである。遠く離れた吉備（岡山県）に一基のみある直弧文系装飾古墳の千足古墳の直弧文が彫刻された仕切石とまわりの石障の石材は、宇土半島基部から運ばれたもの〔高木恭二他 1986〕といい、火の君が何らかの意図で運ばせたものであろう。

福岡県から佐賀県にかけての有明海沿岸地域には、6世紀代になって彩色の装飾古墳が出現する以前に、直弧文系の装飾古墳が築造されている。その最古のものは、5世紀半をやや遡る時期に造られたと考えられ、横穴式石室に横口式家形石棺を納めた石人山古墳である。家形石棺の屋根には直弧文と円文が彫刻され、石材は肥後の菊池川下流域から運ばれたもの（高木恭二氏教示）である。柳沢一男氏は、「もし憶測が許されるならば、熊本県外の有明海沿岸域に分布する直弧文系列の装飾古墳の築造は、肥後中南部勢力との密接な関係のもとに可能となったとみたい」〔柳沢 1993〕と述べているが、これらの古墳こそ火の君との政治的あるいは血縁的など何らかの関係で肥後の工人を導入して造られた筑紫の君の墳墓と考えたい。

肥後の直弧文系列の装飾古墳の被葬者の処点は、初期には宇土半島基部であったのが、後には大野窟古墳を含む津野古墳群のある肥後南部へ移るものと考えられる。この考えは、井上辰雄氏〔井上 1996〕が、火の君の本拠地の移動と考えられていることとも一致するものである。

肥後の各地で展開する地域ごとの特徴のある装飾古墳は、各地域で火の君と関わりを持ちながら

地域を支配した中小豪族の歴代墳墓であると考えられる。中でも宇土半島基部の舟を線刻した装飾古墳は、火の君の下で水軍を指揮した豪族の墳墓であろう。

## おわりに

昭和35年、当時小学6年生であった筆者は、父に連れられて山鹿市のチブサン古墳を見学に行った。ちょうど日下八光先生が助手の方と暗い石室の中に裸電球を灯して、石屋形内壁の装飾文様を模写しておられたが、快く見学を許して頂いた。その時の装飾文様の美しさに対する感動と、緻密な模写作業に対する畏敬の念は、今でも忘れることができない。本稿が日下八光先生の希望される[日下 1993]装飾古墳の「編年的研究」の礎となれば幸である。

本稿を成すにあたり、熊本大学の甲元眞之教授には装飾古墳の現地調査段階から援助を頂いており、国立歴史民俗博物館開館10周年記念企画展示「装飾古墳の世界」展の展示プロジェクト委員の先生方には大変お世話になった。特に玉利勲先生と白石太一郎先生の励ましのおかげで本稿は完成したものである。また熊本古墳研究会でいっしょに学んでいる人達、特に代表の高木恭二氏や、メンバーの西健一郎氏、古城史雄氏らには常日頃御教示を受けており感謝の意を表したい。なお、本稿は諸先学の研究の延長上で成立したものであるが、先学の功績について述べる余裕がなかった。諸先学の御寛容をお願いしたい。

## 参考文献

- 池田栄史 1984 「小鼠蔵3号古墳」(高木編 1984 a 所収 170~171頁)  
 石山 勲 1993 「福岡県萩ノ尾古墳」『装飾古墳の世界』184頁 国立歴史民俗博物館  
 伊藤奎二 1984 a 「中郡古墳」(高木編 1984 a 所収 99~100頁)  
 — 1984 b 「富ノ尾1号古墳」(高木編 1984 a 所収 79~81頁)  
 — 1984 c 「千金甲3号古墳」(高木編 1984 a 所収 86~87頁)  
 伊藤玄三 1984 『直弧文』(『考古学ライブラリー』28)  
 井上辰雄 1996 「九州の古代と火の君」『火の国の原像』36~42頁 熊本地名研究会  
 上野辰男 1984 「横山古墳」(高木編 1984 a 所収 62~65頁)  
 梅原末治 1917 a 「日奈久町字永迫古墳」(浜田ほか 1917 a 所収 43~44頁)  
 — 1917 b 「葦北郡日奈久町の古墳」(浜田ほか 1917 a 所収 38~43頁)  
 — 1917 c 「宇土郡不知火村の古墳」(浜田ほか 1917 a 所収 24~29頁)  
 — 1917 d 「飽託郡小島町千金甲高城山古墳群」(浜田ほか 1917 a 所収 16~24頁)  
 — 1917 e 「玉名郡玉名村の三古墳」(浜田ほか 1917 a 所収 58~64頁)  
 — 1919 a 「肥後国八代郡龍峯村の古墳」(浜田ほか 1919 a 所収 46~48頁)  
 — 1919 b 「肥後国八代郡吉野村の古墳」(浜田ほか 1919 a 所収 42~45頁)  
 — 1919 c 「肥後国宇土郡花園村の古墳」(浜田ほか 1919 a 所収 22~27頁)  
 — 1919 d 「肥後国上益城郡杉上村の古墳」(浜田ほか 1919 a 所収 28~29頁)  
 — 1919 e 「肥後国下益城郡今城の古墳」(浜田ほか 1919 a 所収 30~33頁)  
 — 1922 「玉名郡江田村中小路穴観音古墳」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』1 63~65頁  
 E・S・モース 1917 『日本その日その日』(石川欣一訳 1971)  
 江上敏勝 1984 a 「大鼠蔵西北麓2号古墳」(高木編 1984 a 所収 168頁)  
 — 1984 b 「大鼠蔵東麓1号古墳」(高木編 1984 a 所収 165~166頁)  
 — 1984 c 「大鼠蔵東北麓2号古墳」(高木編 1984 a 所収 167頁)  
 江本 直 1984 「小田良古墳」(高木編 1984 a 所収 135~139頁)  
 大牟田市教育委員会 1992 『国指定史跡萩ノ尾古墳』(パンフレット)  
 緒方 勉 1984 「今城大塚古墳」(高木編 1984 a 所収 92~94頁)  
 乙益重隆 1964 「稻荷山古墳」(小林編 1964所収 83頁)

- 
- 編 1974 『装飾古墳と文様』（『古代史発掘』8）
- 1984 a 「熊本県下における装飾古墳の発見と研究の歴史」（高木編 1984 a 所収 363～369頁）
- 1984 b 「経塚古墳」（高木編 1984 a 所収 29頁）
- 1984 c 「小鼠蔵1号古墳」（高木編 1984 a 所収 169～170頁）
- 1984 d 「長迫古墳」（高木編 1984 a 所収 174～175頁）
- 1984 e 「広浦古墳」（高木編 1984 a 所収 144～145頁）
- 1984 f 「大王山古墳」（高木編 1984 a 所収 159～160頁）
- 1984 g 「長砂連古墳」（高木編 1984 a 所収 140～141頁）
- 1984 h 「井寺古墳」（高木編 1984 a 所収 88～91頁）
- 1984 i 「国越古墳」（高木編 1984 a 所収 127～130頁）
- 1984 j 「釜尾古墳」（高木編 1984 a 所収 75～78頁）
- 清田純一・豊崎晃一 1986 『塚原古墳群発掘調査報告書』（『城南町文化財調査報告書』第5集）
- 日下八光 1993 「装飾古墳を描く」『装飾古墳の世界』33～34頁 国立歴史民俗博物館
- 隈 昭志 1984 a 「持松塚原古墳」（高木編 1984 a 所収 59頁）
- 1984 b 「石立古墳」（高木編 1984 a 所収 68頁）
- 1984 c 「大鼠蔵尾張宮古墳」（高木編 1984 a 所収 163～164頁）
- 1984 d 「大戸鼻北古墳」（高木編 1984 a 所収 146～148頁）
- 1984 e 「大戸鼻南古墳」（高木編 1984 a 所収 148～149頁）
- 1984 f 「稲荷山古墳」（高木編 1984 a 所収 82頁）
- 1984 g 「塚坊主古墳」（高木編 1984 a 所収 30～34頁）
- 1984 h 「袈裟尾高塚古墳」（高木編 1984 a 所収 69～72頁）
- 熊本県教育委員会 1994 『国指定史跡塚坊主古墳』（『熊本県文化財整備報告』第1集）
- 桑原憲彰・勝又俊一 1987 『オブサン古墳』（『熊本県文化財調査報告』第87集）
- 小林行雄編 1964 『装飾古墳』
- 佐藤伸二 1984 a 「五反田古墳」（高木編 1984 a 所収 172～173頁）
- 1984 b 「田川内3号古墳」（高木編 1984 a 所収 181～182頁）
- 1984 c 「竹ノ内古墳」（高木編 1984 a 所収 182頁）
- 1984 d 「日奈久神社の石材」（高木編 1984 a 所収 176頁）
- 1984 e 「日奈久山下町の石材」（高木編 1984 a 所収 176～177頁）
- 1984 f 「門前2号古墳」（高木編 1984 a 所収 161～162頁）
- 1984 g 「田川内1号古墳」（高木編 1984 a 所収 178～180頁）
- 1984 h 「田川内2号古墳」（高木編 1984 a 所収 181頁）
- 島田貞彦 1919 a 「肥後国天草郡維和村の古墳」（浜田ほか 1919 a 所収 14～21頁）
- 1919 b 「肥後国下益城郡松橋の古墳」（浜田ほか 1919 a 所収 34～37頁）
- 下林繁夫 1984 「長砂連古墳調査報告」（高木編 1984 a 所収 141～143頁）
- 勢田廣行 1984 「宇賀岳古墳」（高木編 1984 a 所収 101～104頁）
- 高木恭二・木下洋介・本松茂樹 1986 『ヤンボシ塚古墳・檜崎古墳』（『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第13集）
- 1994 a 「石障系横穴式石室の成立と変遷」『宮嶋クリエイト』第6号 109～132頁
- 1994 b 「肥の石製品と古墳文化」『石人・石馬』72～79頁 八女市教育委員会
- 高木正文編 1984 a 「熊本県装飾古墳総合調査報告書」（『熊本県文化財調査報告』第68集）
- 1984 b 「江田穴観音古墳」（高木編 1984 a 所収 35～37頁）
- 1984 c 「石貫ナギノ横穴墓群」（高木編 1984 a 所収 196～210頁）
- 1984 d 「今村岩ノ下横穴墓群」（高木編 1984 a 所収 185～109頁）
- 1984 e 「原横穴墓群」（高木編 1984 a 所収 218～226頁）
- 1984 f 「石貫穴観音横穴墓群」（高木編 1984 a 所収 191～195頁）
- 隈 昭志 1984 g 「付城横穴墓群」（高木編 1984 a 所収 319～323頁）
- 1984 h 「鍋田横穴墓群」（高木編 1984 a 所収 299～318頁）
- 1984 i 「桜ノ上横穴墓群」（高木編 1984 a 所収 290～298頁）
- 1984 j 「大村横穴墓群」（高木編 1984 a 所収 344～355頁）
- 1984 k 「京ガ峰横穴墓群」（高木編 1984 a 所収 356～359頁）
- 1984 l 「小原横穴墓群」（高木編 1984 a 所収 360頁）
- 田添夏喜 1984 a 「大原9号石棺」（高木編 1984 a 所収 15～17頁）
- 1984 b 「大坊古墳」（高木編 1984 a 所収 18～20頁）
- 1984 c 「馬出古墳」（高木編 1984 a 所収 27～28頁）
- 田辺哲夫 1984 a 「永安寺東古墳」（高木編 1984 a 所収 21～24頁）
-

- 1984 b 「永安寺西古墳」(高木編 1984 a 所収 25~26頁)
- 富樫卯三郎 1984 a 「晩免古墳」(高木編 1984 a 所収 107~108頁)
- 1984 b 「潤野古墳」(高木編 1984 a 所収 105~106頁)
- 1984 c 「梅崎古墳」(高木編 1984 a 所収 112~114頁)
- 富田紘一 1976 「原始古代」『鹿本町史』36~147頁
- 浜田耕作・梅原末治 1917 a 「肥後に於ける装飾ある古墳及び横穴」(『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第1冊)
- 1917 b 「阿村大戸北古墳」(浜田ほか 1917 a 所収 45~46頁)
- 1917 c 「阿村大戸南古墳」(浜田ほか 1917 a 所収 46~47頁)
- 1917 d 「上益城郡六嘉村井寺古墳」(浜田ほか 1917 a 所収 8~16頁)
- 梅原末治・島田貞彦 1919 a 「九州に於ける装飾ある古墳」(『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第3冊)
- 1919 b 「肥後国飽託郡西里村釜尾の古墳」(浜田ほか 1919 a 所収 2~13頁)
- 原口長之 1984 a 「持松3号古墳」(高木編 1984 a 所収 60頁)
- 1984 b 「浦大間4号石棺」(高木編 1984 a 所収 61頁)
- 1984 c 「チブサン古墳」(高木編 1984 a 所収 42~46頁)
- 1984 d 「白塚古墳」(高木編 1984 a 所収 34~41頁)
- 1984 e 「馬塚古墳」(高木編 1984 a 所収 49~51頁)
- 1984 f 「オブサン古墳」(高木編 1984 a 所収 47~48頁)
- 1984 g 「御霊塚古墳」(高木編 1984 a 所収 56~58頁)
- 1984 h 「弁慶ガ穴古墳」(高木編 1984 a 所収 52~55頁)
- 1984 i 「上御倉古墳」(高木編 1984 a 所収 73~74頁)
- 隈 昭志 1984 j 「石川山4号墳」(高木編 1984 a 所収 66~67頁)
- 高木正文 1984 k 「長岩横穴墓群」(高木編 1984 a 所収 260~276頁)
- 平山修一 1984 a 「東畑古墳」(高木編 1984 a 所収 115頁)
- 高木恭二 1984 b 「桂原2号古墳」(高木編 1984 a 所収 134頁)
- 1984 c 「城塚古墳」(高木編 1984 a 所収 114頁)
- 1984 d 「仮又古墳」(高木編 1984 a 所収 116~118頁)
- 古城史雄 1995 「九州における横穴式石室の様相——石屋形を中心として——」『横穴式石室にみる山陰と九州——石棺式石室をめぐって——』70~105頁(『古代の出雲を考える』8)出雲考古学研究会
- 三島 格 1965 「坂本装飾古墳」『城南町史』78~79頁 城南町役場
- 1984 a 「竜北高塚古墳」(高木編 1984 a 所収 154~158頁)
- 1984 b 「石之室古墳」(高木編 1984 a 所収 97~98頁)
- 1984 c 「桂原1号古墳」(高木編 1984 a 所収 131~133頁)
- 1984 d 「不知火塚原1号古墳」(高木編 1984 a 所収 124~126頁)
- 1984 e 「千金甲1号古墳」(高木編 1984 a 所収 83~85頁)
- 1984 f 「坂本古墳」(高木編 1984 a 所収 95~96頁)
- 1984 g 「鴨籠古墳」(高木編 1984 a 所収 119~123頁)
- 1984 h 「大野窟古墳」(高木編 1984 a 所収 150~153頁)
- 1984 i 「甚九郎山古墳」(高木編 1984 a 所収 96頁)
- 1984 j 「三ノ宮古墳」(高木編 1984 a 所収 12~14頁)
- 1984 k 「四ツ山古墳」(高木編 1984 a 所収 11頁)
- 森貞次郎 1985 「装飾古墳」
- 柳沢一男 1993 「福岡県日輪寺古墳」『装飾古墳の世界』186頁 国立歴史民俗博物館

### 挿図出典

- 図3：田添1984 a 文献を改変。
- 図4-1：乙益1984 a 文献を改変。
- 図4-2：隈1984 a 文献を改変。
- 図4-3：原口1984 a 文献を改変。
- 図4-4：原口1984 b 文献を改変。
- 図4-5：隈1984 b 文献を改変。
- 図6-小鼠蔵1号墳：乙益1984 b 文献を改変。
- 図6-大鼠蔵尾張宮古墳：隈1984 c 文献を改変。
- 図6-大戸鼻北古墳：隈1984 d 文献を改変。
- 図6-長迫古墳：乙益1984 d 文献(乙益写真)、佐藤1984 d・e 文献を改変。

- 
- 図6 - 門前2号墳：佐藤1984 f 文献（白石巖写真）。  
図6 - 田川内1号墳：佐藤1984 g 文献を改変。  
図6 - 小嵐蔵3号墳：池田1984文献を改変。  
図6 - 大嵐蔵東麓1号墳：江上1984 b 文献を改変。  
図6 - 広浦古墳：島田1919 a 文献，乙益1984 e 文献を改変。  
図6 - 大戸鼻南古墳：隈1984 e 文献を改変。  
図8 - 大王山古墳：乙益1984 f 文献を改変。  
図8 - 大野村石棺：E・S・モース1917文献を復元改変。  
図8 - 竜北高塚古墳：梅原1919 b 文献，三島1984 a 文献を改変。  
図8 - 晚免古墳：梅原1919 c 文献を復元改変。  
図8 - 潤溜野古墳：梅原1919 c 文献を復元改変。  
図8 - 中郡古墳：伊藤奎二1984 a 文献を改変。  
図8 - 石之室古墳：三島1984 b 文献を改変。  
図8 - 北原1号墳：清田ほか1986文献を復元改変。  
図10 - 小田良古墳：江本1984文献を改変。  
図10 - ヤンボシ塚古墳：高木恭二ほか1986文献を改変。  
図10 - 桂原1号墳：三島1984 c 文献を改変。  
図10 - 桂原2号墳：平山ほか1984 b 文献を改変。  
図10 - 不知火塚原1号墳：三島1984 d 文献を改変。  
図10 - 梅崎古墳：富樫1984 c 文献を改変。  
図10 - 仮又古墳：平山1984 d 文献を改変。  
図12 - 長砂連古墳：乙益1984 g 文献，下林1984文献，伊藤玄三1984文献を改変。  
図12 - 千金甲1号墳：三島1984 e 文献を改変。  
図12 - 井寺古墳：乙益1974文献，乙益1984 h 文献を改変。  
図12 - 鴨籠古墳：梅原1917 c 文献，三島1984 g 文献を改変。  
図12 - 国越古墳：乙益1984 i 文献を改変。  
図12 - 宇賀岳古墳：勢田1984文献を改変。  
図12 - 大野窟古墳：三島1984 h 文献を改変。  
図14 - 合城大塚古墳：緒方1984文献を改変。  
図16 - 千金甲1号墳：三島1984 e 文献を改変。  
図16 - 富ノ尾1号墳：伊藤奎二1984 b 文献を改変。  
図16 - 釜尾古墳：浜田1919 b 文献，乙益1984 j 文献を改変。  
図16 - 横山古墳：上野1984文献を改変。  
図16 - 千金甲3号墳：梅原1917 d 文献，伊藤奎二1984 c 文献を改変。  
図16 - 稲荷山古墳：隈1984 f 文献を改変。  
図18 - 塚坊主古墳：熊本県教育委員会1994文献を復元改変。  
図18 - 大坊古墳：田添1984 b 文献を改変。  
図18 - 馬出古墳：田添1984 c 文献を改変。  
図18 - 永安寺東古墳：田辺1984 a 文献を改変。  
図18 - 永安寺西古墳：田辺1984 b 文献を改変。  
図18 - 江田穴観音古墳：高木1984 b 文献を改変。  
図19 - チブサン古墳：原口1984 c 文献を改変。  
図19 - 白塚古墳：原口1984 d 文献を改変。  
図19 - 馬塚古墳：原口1984 e 文献を改変。  
図19 - オブサン古墳：桑原ほか1987文献を改変。  
図19 - 御霊塚古墳：原口1984 g 文献を改変。  
図19 - 弁慶ガ穴古墳：原口1984 h 文献を改変。  
図20 - 袈裟尾高塚古墳：隈1984 h 文献を改変。  
図20 - 上御倉古墳：原口1984 i 文献を復元改変。  
図21 - 石川山4号墳：原口ほか1984 j 文献を復元改変。  
図22 - 四ツ山古墳：三島1984 k 文献を改変。  
図22 - 萩ノ尾古墳：大牟田市教育委員会1992を復元改変。  
図24 - 石貫ナギノ8・43号横穴墓：高木1984 c 文献。  
図24 - 今村岩の下I - 1号横穴墓：高木1984 d 文献。  
図24 - 原13・7号横穴墓：高木1984 e 文献。
-

- 
- 図25-付城57・72号横穴墓：高木・隈1984 g 文献。  
図25-鍋田52号横穴墓：高木1984 h 文献。  
図25-長岩91号横穴墓：原口・高木1984 k 文献。  
図25-桜ノ上 I - 2 号横穴墓：高木1984 i 文献。  
図27-大村15 b・5・11・14号横穴墓：高木1984 j 文献。

(熊本県教育庁文化課，国立歴史民俗博物館展示プロジェクト委員)

## **Origins and Development of Decorated Tombs in Higo (Kumamoto Prefecture), Kyushu**

TAKAKI Masafumi

This paper explores the origin and spread of Kofun Period decorated tombs in the ancient province of Higo where some 190 decorated tombs, the highest number in Japan, have been discovered. To this purpose, the author proposes a relative-chronological framework for these tombs, that takes into consideration the structure of burial chambers and regionally specific decorative patterns.

The earliest decorated tombs are in present Yashiro City, where the decorations feature engraved circular patterns. These circular patterns probably symbolized bronze mirrors, and were engraved on the surface of stone partitions and inside the stone coffins situated in corridor-style stone burial chambers. Apart from the circular patterns, there were also engraved designs of bows, quivers, cuirasses, and long swords. These probably date to the early fifth century A. D.

The spatial distribution of decorated tombs expanded as far as to Amakusa and the Uto Peninsula. The expansion continued to the north in the fifth century to present northern Kumamoto City. The colors of blue and yellow were adopted at this stage in addition to engraving, relief, and the use of red paint. The decorations became more elaborate.

In the early sixth century, decorated tombs appeared in the northern Higo region, such as the areas of present Tamana City and Yamaga City. Decorations were applied to a stone structure shaped like a house and its vicinity, found to the rear of a corridor-style burial chamber. The decorations on it were done with colors applied simply to line engravings, and by simple painting. Along with the structure of a corridor-style burial chamber unique to Higo, the decorative tombs originated from Higo diffused to the entire northern Kyushu.

In the mid-sixth century, decorative patterns influenced by ideology of continental origin may have been added. I end with the hypothesis that decorative tombs of Kyushu had an impact on the construction of decorative tombs in the rest of Japan.